討漢詩集

討清歌集

ハヘー士編

駿〻堂藏版

討清歌集自序

宣戰の大詔一たび下り、大纛を廣島に移さゝせられ、親しく軍國の事を統させたまひてより、皇師の向ふ處前に敵なく、前軍既に馬を鴨綠江に飲ひ、長驅して直ちに奉天を衝かんとし、二軍又旅順を陷れ、半島敵の隻影を止めず、而して海軍力渤海を壓し、敵艦を威海衛に蹙む、而かも清虜頑冥未だ悔悛せず、膺懲の擧前途悠遠たり、此の時に當り、天候漸く寒く、內地溫暖の地と雖も、已に六花の紛飛するを見る、遼東寒瘠の地、祁寒吾人の想像の外に出づべし、幸ひに遠征將士の忠武、悽愴たる荒野、蒼天を屋とし、砂場を床とし、櫛風沐雨、食するに粱肉なく、焚くに薪草なきも、英氣不屈、東西に馳騁し、南北に轉鬪し、國民に代つて具

さゝ慘苦を嘗む、一念此ゝ至る、誰か愴然として、涙なからん、

然り而して、國民亦内ゝ在つて、此の曠古罕覯なる義戰を翼贊し奉り、茅屋の寡婦、閭村の老爺に至る迄、或ハ恤兵ゝ、或ハ獻金ゝ、各其赤心を吐露し、以て此遠征十萬の貔貅の辛酸ゝ酬ゆるところあらんとす、

本篇載する所の歌、亦之れ國民敵愾の餘聲、其遠征將士の功を頌し、勞を謝し、勇を皷す、殆んど盡せりとす、採錄或ハ當を得さるものあるハ、此れ編者の罪、卷を閲くの士、宜敷國民赤誠のある所を察し、編者の罪を咨むるなくば幸甚

乙未新正　　浪華客舍ゝ於て　　丿て丿士誌

討清歌集目次

清の國をうたせたまうとて御軍をいたしたまへるとき

よめる歌……羽鳥倭文雄

宣戰の詔勅を捧讀して……伊藤武

大元帥陛下の御發輦をかしこくもおろがみまつりて……千葉胤明

鸞輿向西……鐵幹

廣島の行幸　勝戰の大詔……逸見仲三郎

征清歌……日本撫子

外征歌……長谷場致堂

從軍行……鐵幹

從軍行……石森和男

從軍行……水野隆宗

北京にすゝめ……

奉天府……落葉
脚あらば往け！……雲野通路
豐島……小中村義象
軍艦操江……千瀾萬濤樓主人
獲操江……太田元綱
安城渡の役……大原恒齋
喇叭卒……鐵幹
拔牙山……宮澤春文
中和の朝風……一柳安次郎
船橋里……仝人
平壤城……素琴女史
平壤の戰……西垣佐太郎
陷平壤……宮西惟助

平壤の戰に我陸軍大勝利と聞て詠る歌……梅園寅清
陸軍大勝利の歌……田名部彦一
將軍不誇……鐵幹
鴨綠江上の野營……雲野通路
鴨綠江……小中村義象
捷報來……柳井綠太郎
太孤山沖の戰……千瀾萬濤樓主人
太孤山沖の海戰……田村幸子
海洋島邊の戰に我海軍大勝利と聞て詠る歌……讀人知らず
艦長戰死……梅園寅清
我海陸軍の大勝をさゝてよめる歌……千瀾萬濤樓主人
陸軍の勇擊……八疊庵主人
海軍の猛戰……逸見仲三郎
皇軍の勝を祝ひてよめる歌……高島茂秀

我軍清國の仇と戦ひ大に勝たりと聞きてよめる歌幷短歌……海上胤平
聞我陸海軍大捷作歌……本多晋
塞上曲……金子雄太郎
軍中曲……半月仙
軍中月……鐵幹
弓張月……佐々木信綱
洋上月……千瀾万濤楼主人
海上宴……仝人
兵士の妻……黒田如雲
生別……湖處子
わすれがたみ……羽場愿一
豫備兵……松琴生
太郎……鐵幹

機女……槐園主人
廢征衣……かざしの花
わがせ……登美子
月あかき夜小野里に砧を聞きて……與謝野修
秋の夕ぐれ……世外佳人
關のあなたに住むなる或やもめ亡き夫の石碑の料にとて積みたりし黄金五十兩を、こたびの征清の軍資の片はしにだにとて献納したりと云ふを聞き其心根や如何なりけむと思ひやりて……みよしの
雨後月……かさしの花
明月……伊良子晋造
仲秋月……かさしの花
高麗野の露……柳城子

平壤懷古……田村幸子
諸越を征討の御盛擧を稱贊へまつる長歌……青木幸躬
吾國の將士の朝鮮に行くを送る歌幷短歌……田名部彦一
遠征軍……大島經昌
懸軍萬里……鐵幹
丈夫……柴田顯信
我軍の連戰連勝を聞きて○○に在る某將校に贈らんとて詠
みたる歌……尾崎壯三
わか友渡邊氏が從軍のため國にかへらんとて月の夜にたび
たてるを追ひて……維孝
默水山莊主人の渡韓を送りて……鐵幹
老將軍……羽生芳太郎
老壯士……落葉

從軍畵伯……仝人
天機伺ひまつらむと廣島表にむかひし時……東角井福臣
清國を征する我軍人の勝利を祈る歌一首幷短歌……佐藤恭順
征清事件につきてよめる長歌幷短歌……大野寛蔭
皇國の旗……中村秋香
三國の關係　東方の安危……逸見仲三郎
民力の鐵壁　國勢の干城……仝人
清國の瓦解近つきぬと聞て瓦に寄せてよめる長歌幷短歌……小林正和
靈鷹をよめる歌……湯谷基守
清國の兵士捕虜となりてひかれゆくかたに……梅園寅清
赤十字の歌……菟道春千代
歌へや歌人……落葉
外に

和歌　五百首

討清歌集目次終

討清歌集

涙華丿丿士編

○清の國をうたせたまふとて御軍をいたし

たまへるときよめる歌　羽鳥倭文雄

掛巻もかしこけれとも、現つ神吾大君ハ、大御言のらしたまひて、天つたふ日のいる國の、唐國をうたせたまふと、磐余彦神の命の、古事をおほしましけむ、天つ日の御旗おし立、日の御影そひらよおひて天さかる鄙にいてまし、軍事すへたまへれバ、もののふの八十伴の緒ハ、大御言いたゝきもちて、船うかへ馬をつらなめ、御軍を陸ゆも出し、御軍を海ゆもすゝめ、山ゆかバ草むすかバね、海ゆかバ水つくかバね、眞心を我こそもたれ、我ハしものとにハしなしと、をたけひにいや健ひつゝ、つき〳〵にいゆきわたりて、まつろハぬ敵うちきため、あたなへる船打しつめ、拷衾新羅をおつけ、諸越のからのくぬちよ、やゝ〳〵よせめてしいれバ、筒すてゝ敵

いまつろひ、船すてゝゐみしはしそき、今ゆ後いくかもあらず、たてこもる大城を
とりて、朝日なす御稜威かゝやく、吾國の御旗おしたて、諸聲よかちとさあけむ、そ
こもへゝ大御軍のいさましきかも、

○宣戰の詔勅を捧讀して

伊藤武

一　かけまくもあやかしこし　いよしへゆためしもきかぬ
すへらきのかみのみことの　かむなからのらししみこと
このおほみこと

二　かりこものみたれみたれし　こまの野のくさかりはらひ
うつくしきやまとなでしこ　うつしうゑておふしたてむの
このおほみこと

三　さひつるやからのゐひすの　八重むくらみちさまたけて
こまの野ようちはひこるを　きりなひけきりてすてむの
このおほみこと

四　かしこみてささけ持ちつつ　くりかへしななたひ八たひ
よむ小手よなみたこほれぬ　おもはゐすこゑさゐ立てぬ
にくしやゐひす

五　この涙おちてつもらは　アリナレのかはもあふれむ
このこゑのたちもひひかは　支那のうみ千ひろのそこの
なみもさわかむ

六　いさともにふるひたちつつ　ゐひすらをせめまつろへて
すへらきのかみのみことの　みこころにこたへむすへは
海にはた山に

七　うなはらのかせにきはひて　しらなみのよせてはくたき
ももちふねふねのこととと　あらうみのそこよしつめて
嶋やつくらむ

八　つるきたちたちむかひつつ　こまのやま越ゐくるゑひす

ちよろつのあたのことこと　うちとめてアリナレ川の
しからみにせむ

○大元帥陛下の御發輦をおしこくれおろがみまつりて

千葉胤明

出たゝす大御輦の響きよそ高麗唐土もゆりくづるらむ淡ましけふ出たゝすみをさきよ仕へ奉れる益荒雄の友萬世とことほぎ歌ふ聲のうちに大御輦はとゝろきにけり軍人いさむが上に勇むらん龍よつゞさを添ふ心ちしてみ輦のすくる大路ゝ劔もて垣ねゆたる心ちこそすれ

○鸞輿向西

鉄幹

御車は、今か出づらし。むらさきの、雲間よなびく、大御旗。
常あらば、このいでましも、須磨明石　月の行幸と、いはましを。

○廣島の行幸　勝戰の大詔

逸見仲三郎

安見しゝ我が天皇ゝ、大元帥よしませば、その軍制議り給ふと、その軍列整へます

と、御心を廣島の市に、大本營を進ませ、是彼の便宜かれと行幸て着御しをりに、戰の勝てる報を、かしこくも聞召しけり、かゝる折かゝる報ゝ、海の外の遠き國邊に、大稜威いよゝ輝き、國の名のいよゝ揚らむ、善美き吉兆なれこそ、海陸両皇軍に、大詔下し給ひて、國の爲君の御爲に、忠情深かるものと、賞で給ひ悅びませれ、武官にあらぬ文官も、文官よあらぬ公民も、射放たむ矢竹心の、一筋よ力を協せ、此の旨を貫きてむと、各自競へる見ればゆゝしいさまし。

○征清歌

日本撫子

もろこしのもろきいくさ人、いくよろづむれつとふとも、皇國のたけきますらを、をこゝろを奮ひおこして、一筋に勇みすゝまは、まもりかねまつろひぬへく、さゝへかねしたかひぬへし、かくのことまつろはせなは、かくのことしたかはせなはいかはかりこゝろよからん、いかはかりたのしからまし、もろこしのもろき軍人、いさ共よとくうちひしき、日の御旗たてゝうたはん君かよろつ代

○外征歌

長谷場致堂

皇の御稜威ともろともに、
この國民の眞こゝろを、
かさして匂ふ旭かげ、
さすや錦の旗の手に、
唐人も高麗人も、
膝打敷ておのづから、
大和劍の風よ伏すらん、

○從軍行

鉄幹

大男兒、死ぬべき時に死ぬを得ば、
捨つる命は惜しからじ。
五十年、太平の夢をむさぼりて、
なほか空しく長らへむ。』

おもしろし、千載一遇このいくさ、
大男兒、死ぬべき時こそ來りけれ。
けふきけば、平壤のいくさも勝ちぬとか、
長驅して、こたびはつかむ奉天府。』

あゝゆゑゝ劍はまあびし、
なゝゆゑゝ書はよみつる。
かかる時用ゐむためぞ、
かかる時死ぬべきためぞ。
いざさらば、世よ思ひおく事もなし、
我は唯だ行く戰場よ。』

○從軍行

日本刀

石森和男

日本刀の太刀さきに
飛ちる火玉蹴散して
　日本魂

やまと魂みがきつつ
かねて鍛へし此腕を
　屍に草

屍ゝ草は生ひむとも
死して甲斐ある此命
　群る夷

群るゑびす斬はふり
駒ゝ水かひいざ進め
　鯨波の聲

鯨波の聲あげ諸共に
今ぞ北京に攻入りて

○北京よすゝめ

時こそ來つれ我國の、
四千餘萬の國民は、
　北京よすゝめと

手向ふほとの敵やある
賊のはらわた破るべし

忠實勇武のますらをが
試さむ時こそ來りけれ

月ゝ屍ゝさらすとも
正義の爲ゝは惜からず

はや平壤は乘つ取りつ
鴨綠江をばあとゝ見て

へぎる敵を斬まくり
旭日の御旗押し立てむ

水野隆宗

光かゝやく曙に、
ひとつ心ゝよよばふ也、
　よばふなり。

銃をまくらの夢破る、
かたしく袖に霜置て、
　北京よすゝめと

夜半の喇叭の聲高し、
高麗のはり原吹風も、
　きこゆなり。

降は霰か彈丸に似て、
渤海灣の朝風に、
　北京よすゝめと

陸地も近くなりゝけり、
岸うつ波の音きけば、
　ひゝくなり。

開けゆく世の光もて、　暗き國原てらさんと、
朝日の御旗捧げつゝ、　聲勇しくうたふなり、
北京よすゝめと　うたふなり。

落葉

○奉天府

奉天府、奉天府、
わがさす方は奉天府。
いざや向はむ滿州に、
亡げたる敵のあとゝめて。』
尙この先に九連城、
鴨綠江の水青く、
流るゝあたりよき敵の、
壘を起して待つときく。』
平壤に一戰に陷れ、
我軍勇氣百倍す。
この勇氣もて進みなば、
百里二百里物ならず。』
九連城、こゝを去ること六十里、
この勇氣もて進みなば、
早くは行かむ五日にて、
遲くも十日に行つかむ。』
いざ進め、進め武夫、
その城も、亦一うちに打破り、
鴨綠江を渡りつゝ、
長驅して、直ちよつかむ奉天府。』
清の寶庫とたのむなる、
都はそこぞ奉天府。

愛親覺羅が祖先より、
墳墓をのこす奉天府。』
北京の城をおとしいれ、
城下の盟をなさしむる、
先つその前にせめとりて、
わが大君のあれましゝ、
よき日をそこに祝ひてむ。』
おもしろしおもしろし、
韓の北境路險しく、
滿州の原風寒くとも、
この勇氣もて進み つゝ、
長驅して、直ちにつかむ奉天府。』

雲野通路

○脚あらば往け！
矢叫びのあと木枯と成り行きて、
物凄き野營の窓のかしあけがた、
圍み座する健兒强て睡らず、
幕を披く寒風篝火を吹く。
忽ちに燃ゑ、又忽ちよ燃ゑず。
忽ちに語り、又忽ちよ語らず。
借問す壯士家を懷ふや否や。
蹶起人を驚かす荒くれ男。
闇を衝て張り上る坂東聲。
家は何處ぞ？家は此處。
手は頭上の幕を指す。
懷ふは誰ぞ？懷ふは是。

胸よは擁す銃、一挺。
首を擧げて曉の星を見れば、
三つ二つ遼西の天よ消殘る。
脚はありや？　脚はあり。
脚あらば往け！
往け、唯往け、北京まで往け！
北京は隔て、渤海の西に在り。
脚はありや？　脚はあり。
脚あらば往け！
往け、唯往け、道あらば往け！
星は到る處の野邊を照す。
脚はありや？　脚はあり。
脚あらば往け！

往け、唯往け、脚あらば往け！
生て國家の干城たらずば、
死して遠征の鬼たらん。

○豐島

小中村義象

鶏のはやしよ風立ちて、
ゆきぎの雲の脚はやし。
吉野、涙連、秋津洲、
探る牙山のみちすがら、
七月二十有五日、
あかつきふかく立つ霧の、
ほのかよ見ゆる敵艦は、
名よ負ふ濟遠、廣乙號。』
彼より打出す無禮の彈丸、

怒るは人と神のみか、
涙さへあらぶる豐嶋の海、
神州男兒何ためらはむ、
互ひたたかふ程もなく、
逃ぐるか卑怯の彼の二艦。
追へども追へどもちりぢり、
のがれゆきしぞあはれなる、
のがれ行きしぞあはれなる。
あなこちよやおもしろや。』
忽ち見ゆる二艘のふね、
牙山をさしていそぐなり。
勝ちに乘りたる我ふねの、
進み〳〵てとりまけば、

あはれや白旗高く立て、
先づこそ降れ操江號。
打出す我砲一發に、
高陞號い沈めたり。』
折しも波風をさまりて、
清き喇叭の聲おこり、
ひがしの空をあふぎつゝ、
世界を動かすかちどきは、
天皇陛下萬々歳、
日本海軍萬々歳。
このいさましきかちどきぞ、
征清軍のはじめなる、
征清軍のはじめなる。

あなここちよやおもしろや。

○軍艦操江

千瀾万濤樓主人

龍の旗あげしその間ゝ
汝こそゝ支那の軍艦
黄なる旗あげし其間ゝ
汝こそゝ支那の軍艦。
黄なる旗朝風にうちなびかせて
龍の旗夕風にうちなびかせて
高麗の海支那の海べを
行かひしこともありけむ。
若干の支那のつはもの
載せて行く船を送ると
錨づなあしたに巻きて

港べを出よしときは
其旗の風になびくを
いさましと人も見つらむ
高麗の海豊嶋のあたり
日の御旗高くかかげて
其下よ白旗かゝげ
力あく降りし時は
錨づなあしたにまきて
港出し勢ひいづく。
あはれ〳〵心なき汝は軍艦
軍艦と名をば負ひつゝ
一うちの戰もせずに
白旗を何かかげけむ。

あはれ〳〵心弱き支那の軍兵
つはものと名をば負ひつゝ
一うちの戰もせずに
命をば何をしみけむ。
日の御旗かゝぐるときは
汝もまた日本軍艦
光の旗かゝぐる上は
汝もまた日本軍艦
日の御旗朝風ようちなびかせて
光の旗夕風にうちなびかせて
高麗の海支那の海べを
いさましく行かひわたれ。
敵の艦よせも來らは

その艦の巨多ありとも
白波の立むかひつゝ
碎かずは碎けて沈め。
日の本のますら武夫は
君のためみくにの爲に
かねてよりさゝぐる命
そのいのち汝も惜むな。
大みふねうちつらなりて
旅順口あすは破らむ
日の御旗高くかゝげて
そのさきがけを汝はせよ。
大みふねうちつらなりて
渤海に明日こそ入らめ

日の御旗高くかゝげて
その道しるべ汝は爲よ。

○獲操江

太田元綱

高麗の海なる豐嶋の、沖明けそむるしのゝめに、敵の軍艦數あまた、波蹴立てゝぞ進み來る、來れや來れ日の本に、仇なす敵よいざ來れ、日本軍艦秋津洲も、吉野も待つぞ今此よ、敵の軍艦數あまた、筒を揃へて打出す、丸をむかへて我艦も、筒を揃へて打出す、

共に打出す大筒の、丸は霰か其音ゝ、空よ轟く雷か、碎くる樣ゝ電か、敵の軍艦忽ちよ、沈み沈むぞあゝれなる、我日の本の丈夫が、打出す筒よ破られて、敵の軍艦數あまた、我日の本の軍艦よ、打破られて打沈づみ、遁るゝ僅か一二隻日本軍艦波を蹴て、遁るを追ふて日の本に、仇なす敵の軍艦を、捕へよけりゐ操江號、昇る朝日よ日本刀、ひらめかしてぞ日の本に、仇なす敵の軍艦を、捕へよけりゐ操江號、はむかふ敵を切り落とし、順ふ者を縛しめて、敵の旗をぞ打倒す我丈夫の勇ましや、我日の本の日の丸の、旗こそ揚がれ操江號、そよ吹く風の朝なぎよ、ひら〳〵ひらと靡きつゝ、歌を謠ふ丈夫の、聲ぞ聞ゆる海原よ、祝砲あぐる其音ぞ、響き渡れる海原に、

○安城渡の役

大原恒齋

すゝめ壯夫　銃とりて　敵もすゝめり　成歡に　すゝみて敵を　打やぶり　牙山の本營　くだくべし　橋ゝ斷たり　安城渡　すゝめ壯夫　國の爲　人の筏を　くみなして　渡れよ渡れ　安城渡　小銃ゝ雨と　ふりきたり　いかづちとゞろく　大砲の煙よあたりゝ　闇となり　釵の稻妻　きらめきぬ　その稻妻を　的となし　敵よりゝなちし　玉霰　みさをたゞしき　松崎の　胸のあたりを　つらぬきぬ　馬より落し　松崎ゝ　吾ゝ死すとも　諸人ゝ　國の爲なり　君の爲　すゝめよすゝめ　牙山まで　すゝめの號令　打聞て　喇叭の聲の　いさましく　吹つゝ進む　壯夫よ敵ゝ喇叭を　しるべにて　放ちしたまゝ　喇叭手の　胸を徹して　飛行ぬ　たふれながらも　いさましく　再喇叭を　とり直し　死すまで吹たり　進軍譜　吾兵これ

に　ハけまされ　さしもに堅き　敵陣を　踏よしりたり　時のまに　敵ハ木の葉と
散初て　よぐるを逐ひつゝ　我兵ハ　成歡のみかハ　牙山なる　敵の本營　攻と
りぬ　牙山成歡　破れしハ　あやよかしてき　日の本の　神のみ末の　天皇の　み
ゐづのいたす　ところなり　しかハあれとも　喇叭手や　常盤の色の　松崎の　死
しても朽ぬ　いさをこそ　澤なる力と　なりにけれ

○喇叭卒

鐵　幹

進め、進め、　君の恩、國の恩、　報ゆる時ハ來りけり。　進め、進め、　吾吹く
喇叭のこの聲よ、　こめて三軍の兵氣あり。』
安城渡、月暗うして伏起る。　何者ぞ、小さかしや敵、　打出す銃のはげしさ。』
進め、進め、　君の恩、國の恩、　報ゆる時ハ來りけり。　吾吹く喇叭のこの聲よ、
こめて三軍の兵氣あり。』
進め、進め、　あゝ名譽なる我れ。　進め、進め、　我胸ハ敵の飛丸に撃れたり。』
進め、進め、　我ハ倒れて起きも得ず。　進め、進め、　異國の草の果報さよ、

日本男兒の血をあびて。』
進め、進め、　かねて捧げしこの命、　何惜しからむ今更に、　國のためまた君の
ため。』
進め、進め、　死なハ護國の鬼よ。　なはも吁吸のつづくまで、　我ハ唯吹くこの
喇叭。』
進め、進め、　君の恩、國の恩、　進め、進め、　報ゆる時ハ來りけり。　進め、
進め、　我吹く喇叭のこの聲よ、　進め、進め、　こめて三軍の兵氣あり。』
あゝ今ハくるしくなりぬ。　目も見ゑず、耳も聞ゑず、聲も出でず。　然れども、
進め、進め、　なは一こゝろは君のため。　なは一こゝろは國のため。

○拔牙山

宮澤春文

命かしてみ太刀執りて、逆卷波虎伏す野邊、こゝしき岩根踏さくみ、韓山遠く駒立
てゝ、進む和の武夫ハ、國の御爲めと父母を、君の御爲めと家も身も、忘れて胸さ
き射らるとも、そびらにハ矢を立てまじと、心雄々敷言立てゝ、我よ仇すとふ言さ

やく、しこの夷を打ちきため、切りて屠りて功を、立つるゝ今と乗る駒の、手綱扣へて鞭打てば、いなゝく音ゑ山ぞよむ、行くてゝ矢玉雨霰、劔の光烟の雲、そば立つわあたゝ敵籠る、牙山と聞けば胸をどり、腕鳴り肉吠ゑ切り結ぶ、刃の匂ひ野に山に、満ちてさらせるしこ草の、屍の上ゑ月さしぬ、

○中和の朝嵐

一柳安次郎

中和の村ゑ日ゝおちて　かたわれ月の影すごく
敵ゝいづこと求むれど　馬のひづめの音もおし』
はやしの中ゑ駒たてゝ　ほこを枕にものゝふゝ
しばしまどろむ木下蔭　夢ゝいづこを辿るらん』
その夜も更けて月五更　露ゑすだける虫の音の
ひたと止けり稲の葉に　そよぐ秋かぜもの淋し』
忽ちきこゆる鯨波の聲　耳をつんざく筒のおと
敵か味方かわかぬ間に　烟りゝみちぬ野ゑ山に』

すはこそ敵の夜討なれ　哨兵線をおやぶられそ
進みてやみ〳〵討るゝあ　この身ゝ君ゑ捧げしぞ』
つゝ音またも響きけり　彼方の山のいたゞきに
敵ゝ間近くよせくらし　林のかげゑこゑもして』
わが兵わづかゑ七八騎　敵ゝ百にもあまるめり
やまと男の兒の鋭心ゝ　かゝる時ゑぞ示すべき』
打亡ぼさんゝ易けれど　われ等ゝ斥候騎兵なり
敵を探りしそのうへゝ　かへらでならじ本隊に』
思ひゝ一つしづ〳〵と　戰ひつゝもしぞくなる
ゆく手ゑまたも敵數騎　劍のふすま立てにけり』
進むも退くも仇なれや　右もひだりもつゝの音
いのちゝ輕し任おもし　いざやぶらん此の圍』
筒の音しげく響くあり　劍のひかりひらめけり

いなゝく馬の聲たかく
夜ゝ早あけて日ゝ高し
血しほしたゝる處〳〵
大和男兒ゝいかにせし
いまし見とめぬ敵陣の
あはれ中和の野嵐よ
ふかれて碎くる露の花

○船橋里

夏くさしげれゞ船橋里
石文たてる其あたり
國のみためと走り猪の
すゑの望をこのさとよ
惜しき別れも君のため
流るゝ血汐ゝ川のごと』
眺め見わたすおほ野原
ふきゆく風のなま臭や』
旅ゆく人にこと問へゞ
軍門よさらす屍四つ』
吹かれて露とちりよ鳧
これぞ男の子の心なる』

一柳安次郎

つはもの共の夢いづて
飛ぶはたる火の色青し』
かへり見せぬを心にて
捨てよし人もあるな覽』
ふるさと遠く旅立ちて

はしき吾妹子その上を
きみの御召よ筆すてゝ
かさね〳〵て今こゝよ
鋤をかた手よいなか歌
はらの皷をたゝきけむ
老も若きもたふときも
ひとつ枕にねむるなり
つるぎの閃きつゝの音
邊りの草木も枯はてゝ
屍ゝこゝようづむとも
みちゆく人も杖とめて
夢みる夫もあるあらむ』
劔とりはきたびまくら
眠れる學者もあるな覽』
とりいる米の豐けさよ
村の田長もあるならむ』
賤しきものも皆こゝに
くにの譽を身にかひて』
いかよ烈しくありつ覽
血汐のあとよ苔ぞむす』
名ゝ萬代も朽ちざらむ
いさををしたふ船橋里』

○平壤城

第一　夕べの露

素琴女史

岡の上に壘壁たかし、麓よゝ　大同江の水ひろし　自からなる其かため　名にこそ
負へれ乎壤城、　夕日をうけて片やぐら　そらのあなたに殘りつゝ　したゝいつし
かくれゐけり　かぎりも知ぬ大旗の　ひらめく影もおぼろにて　ふもとやめぐる飛
鳥の　聲もをり〳〵聞ゐけり　あゝれいみじき此城を　まもるゝ誰ぞ、人もきけ
すぐりし支那兵二十萬　大同江のかゝ水の　さかさゐ流るゝ折にこそ　城もおちな
んいざ友よ　あすのよまたじ待宵ゐ　彼君呼て月見せん……　やまとの兵のよす
るとゝ　夕べの夢に怯れたる　ぶたや見つらん、よしや今　寄せても見よや時の間
にねらひうちして河底の　魚の餌食ゐして見せん　ともよやめなん戰ひの　話ゝ興
をさますべき、話しのうちに見よやとも　月の光の山の端の　くもにかゝりぬ、き
みたちの　姿もかくや、たゐられず　こものや居たる唄女を　とく迎へ來よおりも
のゝ　用意ゐすれず大樽に　酒の泉をたゝへなん　あゝれゆゝしきつゝものゝ　心
や支那兵二十萬　平壤城をまもるおり

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

小夜更て月影白し、見張する　我日の本の兵士の　ぬきもつつるぎ膚寒し　ほこの
枕に露こりて　たゐていつゝく虫の聲　ながるゝ水に月影の　くだくる見れがあす
ゝまた　我も習ゝん己れ見よ　先彼とりで乘り越て……　憐れ笑止やるみしがら
うたげをするかさゝぐめる　驕てぞ夢に魘ゝれむ　つぶやく聲も虫のねも　いつし
かやみて蛇味線の　聲もかすかゐ、ともし火の　影ほそり行く西の空　月落ちかゝ
る平壤城　なにをつてゝかかりがねの　一つらわたる折しもあれ　小高き岡の松か
げに　吟聲高し人ぞたつ

霜ゝ軍營ゐみちて秋氣清し
數行の過雁つき三更

第二　朝あらし

東雲の横雲薄く見ゐそめて　夜ゝまた殘水の上ゐ　朝ぎりのみぞたちあがる　入る
方ちかき明星の　またゝく影か見ゐおがら　とりもうたゝず人眠る　天地寂たり乎
壤城　夢やいづこをまよふらん　かゝる折しも大同江　きしべにそひて一とむれ

の　影や動と見るうちに　一ッせい吹きたす進軍譜　喇叭のひゞき吶喊の聲　山も
ふみさくかけ足の　あし音たてゝつきすゝむ、　いづこに向ふ？平壤城　すゝむゝ
たれぞ日の本の　光をかざすまするをが　心を見する銃劍に　朝霜冴ててうばたま
の　夜ゝしら〳〵とあけにけり
夢や飛命や空ゝさまよひて　そこと定ず打はなす　あだのや玉ゝあられゝ　身にた
つ霰のあるべきか　息をつかせずそとぐるゝ　とくつき落せ追ひ落せ　ひづめをあ
らす荒駒も　指揮の聲ゝいさむらん　高く嘶く聲のして　一齊うちし鐵砲の　烟を
跡ゝのこしけり、　きらめくつるぎ、飛ちがふ　矢玉のひゞき大空ゝ　星やくだく
る榴散彈　耳をかすめてふりおろす、　前ゝ進みしつゝものゝ　もゝをうたれて倒
れたり　うしろにありし一卒ゝ　肩や射れしくれなゐの　血しほにそみて進みけり
倒れしものゝ我と我　きずの矢玉をつかみすて　かち色見する汗ふきの　布ひき
むすび立ちあがり　進めとさゝし一聲ゝ　命とともゝきゝもせん　遲れじものとを
たけひに　かばねの岡を乘越て　ちしほの川の舟はしを　ときをあゝせて押わたる

後ろにのこる外ぐるわ　あだの骸のみまもるなり　あゝれ支那兵二十萬　夕べの月
ゝおきぬらん　草葉の露のはかなくも　あらし吹きたつ旗の手に　ちり〳〵にこそ
なりにけれ　そらゝ見あげし高櫓　ふるふばかりの勝ちどきゝ　と見ゞ匂ふ日の丸
の　旗こそなびけ平壤城　つゞきて起るうたゝいかゝ
君がよは千よに八千よにさゞれいしの
いはほとなりて苔のむすまで
萬々歳の聲たかし

○平壤の戰

名古屋野戰砲兵第三聯隊補充中隊　西垣佐太郎

見るゝこよひと昔より　いひにし三五のよはの月
あすぞすてんと思ふ身ゝ　げにや今宵を限りゝて
こゝろに懸る雲もなく　もろこしかけて澄む影を
高麗の荒野に駒とめて　見渡すそらの面白や

墨田川原よあらねども
待乳の山にあらねども
白き波間に浮く影ゝ
小暗きもりの木末よぞ

秋といへど風さむみ
氷のやいばぬきつれて
こなたの岡の凹みより
川を渡りて敵壘よ

有明月のかげうすく
川面ふかく立ちこめし
ひとこゑ響く筒の音

さやけき水ゝ大同江
ひとむら高き牡丹臺
流れよわたす船の橋
見ゆるゝ敵の旗ならん

おく霜しろきまよ中に
駒の歩みをはやめつゝ
彼方の野邊の小徑より
せまるゝ味方の先鋒軍

夜もはのゝと明初て
さ霧きれゆく絶間より
すゝや軍さゝ始まれり

時こそ來つれ諸共に
かてみてうたん敵壘を

彼ゝ三萬われもまた
二萬よ餘るつはものが
西にひがしよ北みなみ
ひとしくすゝむ平壤府
ひづめの響き吶喊の聲
進軍喇叭の音たかく
旭のみはたふりたてゝ
駈けゆくさまゝ山嵐

憐れ此世ゝくづるらん
天ゝとゝろき地ゝ震ふ
たける雷づち山を裂き
木々ゝくだけて空に舞
飛かふ彈丸ゝ雨あられ
閃めくつるぎゝ稻妻か
百千萬の噴火口
はゆるひゝきぞ物凄き

日ゝはや高く昇れども
鎖す烟にひかりかく

いよ〳〵注ぐ敵の彈丸
名をこそ惜め空蟬の
捧げ祭りしてのむくろ

馬にふるれば馬を斷ち
倒るゝ屍ねふみこえて
とき太刀風よ敵兵ゝ
何處をさして走るとも

一壘くだけ二壘落ち
憐れとも見よ白旗を
されどものこる乙密臺
高きとりでを楯にして

ます〳〵怒る味方の軍
いのちゝかねて大君よ
すつるゝいまと進ゆく

人にふるれば人を斬る
死地に駈入る益荒夫の
支へかねてぞ逃るなり
道るゝ道のあらめやゝ

根城とたのむ牡丹臺
烟の上にかゝげたり
さすがにかたき玄武門
打出すたまの隙もなし

折しもあれや此方より
譽ゝおもし身ゝかろく
驚きまどふ清軍が
死の入る門ゝ開かれて

躍りいでたる兵卒の
よぢてこゆるや敵の壘
支ふる暇もあらばこそ
潮のごとく進むなり

さしもに深き大同江
さしもに廣き平壤府
砲烟彈雨おさまりて
にほふみ旗も日の丸の

流るゝ水のいろあかく
屍ならぬ隈もなし
はれゆくそらの夕日影
ひかりぞよもに輝ける

○陷平壤

宮西惟助

虎伏す野邊の露わけて、虫の音しげき蓬生に、草葉かた敷鋒枕、なれし夜床の月影を過ぐるゝ雁か白雲か、

時こそ來れいざや立て、進め大丈夫行け猛雄、心の駒よ鞭打ちて、御旗の本に死なゞ死ね、燒刃の劔ぬけいでゝ御軍のはさきよ名ゝ揚げよ

進まん行かんいざ死なん、君の御言をかしこみて、國よ盡すと武士が、死ぬ身ゝ輕し名ゝ重し、

幾その城より砦より、雄心かたき丈夫が、打ち出す丸の一筋よ、進むにい向ふ軍なく、向ふに支ふる仇もなし、空よはためく雷と、轟く筒の音高く、煙の眞中に駒走て、進むゝ降れる鳴神か、時こそよけれと丈夫が、矢さけび揚げて天地を、ゆすりどよもす諸聲よ、かしこの砦も破れたり、そこの守も潰えたり、おりゐる雲よ時を得て、驅りし龍も尾を卷ぬ、あはれ潛まん奥わけて、あぎとの玉の眞白玉、採りて返らん時やいつ、

すぎ來し跡を忍びつゝ、君ます方ををろがめゞ、江の水赤き大同の、水灣橋に霧晴れて、空に懸れり日の御旗、

○平壤の戰よ我陸軍大勝利と聞て詠る歌

梅園寅清

ことさへく唐國人しれ人のたふれゐみしら吾國の大御軍よ立ちむかひたむかひすとて山よ住む虎も射ころし谷に住む蛇もとりゐておのかしゝなりはひとする荒男らの強きやつこをよひ集ひ戰かゝしつれ我國の丈夫武雄はしか虎を射ころすことくしか蛇を屠るがごとく立むかふ仇のことゞたやすくもうちきためしと聞が嬉しさ

○陸軍大勝利の歌

田名部彦一

天雲のたなびくかぎり、あまつ日の、てらすきはみよ、國はしも、おほくあれども、人はしも、さはに住めども、あかねさす、日の入るくには、國柄の、代々よかはれば、人こゝろ、とゝのはざれと、くよこそはひろしといへれ、ひとこそは、おほしといへれ、こにきしの、いひのまに〳〵、玉の緒の、いのちのかぎり立ちむかふ、をのこなければ、日の本の、ますら武男が、いさましく、つらねてすゝむ、玉かつら、劍のひかり、いちはやく、玉をこめつゝ、打しきる、火筒のおとよ、目も見ゐ

す、耳もきこえず、かしこみて、逃げて歸るは、ならはしの、つねなりけらし、かきけおす、岩やこもりと、いつのまに、こゝろかためて、守るかと、ふかくさくるに、山なみの、高くそひえて、川なみの、深くめくりて、すゝみ行、路のそこにし鳴神の、音するものを、知らぬまよ、うつめおければ、いくさ人、わかちつかはし、奥山のいはねこゞしき、玉鉾の、道ふみわけて、おちたきつ、音さへふかき、川の瀬を、いさみわたりてうしろよりも、せめたゝかへば、とこいはも、ちりとくたけて、くも子なす、ちりてうせぬれ、松の葉に、風は吹きても水鳥の、おく音きゝてもあた人の、おふかと思ふ、醜男らが、又も來たらん、むら肝の、心もあらじ、しかれとも、心ゆるへす、入日さす、國の都に、いかり猪の、はやくすゝめや、丈夫のとも、

○將軍不誇

大勝利、大勝利、

快電夜いたる大本營。

みさぶらひ、とく燭をたてまつれ、

我君したしく見そおはす。』

御代長月十五日、

我軍四方より押よせつ、

敵を重圍の中ゑして、

はげしき、いくさ打つゝけ、

その日も暮れてそのよるの、

いざよひの月おつる頃、

平壤の城はおとしけり。』

敵は二萬ときこえしが

たま〳〵のがれしその外は、

我れの火力ゑ打果し、

或はきづつけて捕へたり。

敵の兵器と兵糧の、
我手におちしも數知らず、
砲軍の大將左寶貴も、
とりこと爲しゝ中よ在り。』

大勝利、大勝利、
千古未だ聞かぬ大勝利、
この名譽あるたゝかひの
將軍は誰ぞ野津中將。』
將軍つとよ德高く、
誇らぬこゝろのなつかしさ。
この勝利をばつたへたる、
飛電の末に書けるやう、

勇武なる　天皇陛下の御稜威なく
忠義ある將校士卒のあるなくば、
臣の微力、いかでか奏せむ此大勝利。』

○鴨綠江上の野營

雲野通路

其一

限りなき韓山行いて盡なんとす、
壯士暮よ宿す義州城の外。
殺氣天を衝て慘たる秋の夜。
霜は征衣に滿ちて凜たる劍芒。
軍中復た傳令の聲を聞かず、
唯鴨綠江の水濺々を聞く。
獨り營門よ倚て夜を守れば、
天の河黃海の江に橫はる。

首を回せば京城那處に在りや。
首を回せば平壤那處に在りや。
顧ふ、出師命ありて宇品を出で、
檀の浦の水、赤間が關の雲、
天風黑き玄界灘の波濤、
白砂白き北九州の磯風、
いづれか是れ敵國降伏の額。
いづれか是れ豐公名護屋の陣。
ふりし昔を今こゝに
誰かそれぞと白波の
海又海を越來つゝ
釜山の浦の夕景色、
大同の江の朝ながめ、

名殘は今もつきせねど、
銃、とりもちてますらをが
北京をさして急ぐなる
矢竹心の止まらず。
尾の上の霧にわけ迷ふ
山又山を打渡り、
龍山營の夏の雨、
平壤城の秋の風、
名殘は今もつきせねど、
太刀とりはきてますらをが
四百餘州に向ふなる
矢竹心の止まらず、

其二

限りなき韓山行て盡なんとす、
壯士暮に宿す鳴絲江の岸。
殺氣天を衝て慘たる秋の夜。
霜は征衣に滿ちて凜たる劔芒。
軍中復た傳令の聲を聞かず、
唯轡の音の蕭々たるを聞く。
馬を營門に立てゝ敵を窺へば、
天の河遼東の野に横はる。
首を擧ぐれば奉天那處ゝ在りや。
首を擧ぐれば北京那處ゝ在りや。
顧ふ、出師命ありて宇品を出で、
檀の浦の水、赤間が關の雲、
天風黑き玄界灘の波濤、

白砂白き北九州の磯風、
いづれか是れ敵國降伏の額。
いづれか是れ豐公名護屋の陣。
ふりし昔を今ゝよ
誰かそれぞと白波の
海又海を越來つゝ
釜山の浦の夕景氣、
大同の江の朝ながめ、
名殘は今もつきせねど、
太刀とり佩きてますらをが
四百餘州ゝ向ふなる
矢竹心の止まらず。
尾の上の霧にわけ迷ふ

山又山を打渡り、
龍山營の夏の雨、
平壤城の秋の風、
名殘は今もつきせねど、
銃とりもちてますらが
北京を指して急ぐなる
矢竹心の止まらず。

○鴨綠江

小中村義象作歌
柳井綠太郎作詩

虎伏す韓山蹈みならし、進みゆすゝむ我兵士、見よや牙山の敵營ハ、見るまゝ潰ゐて跡もなし、大波さかまく海こゐて、進みにすゝむ我艦隊、見よや豐島の敵艦は、底のもくづとありはてつ、
海陸ともにいさぎよく、むかふは支那の四百州、平壤の山大同の水、よしその山はけはしとも、黃海のなみ威海の潮、よしその波はあらしとも、日章國旗のさすとこ

ろ、いかで靡かぬ國かある、

壯士挺身不顧難　懸軍萬里古三韓
狂濤捲雪西風急　鴨綠江頭立馬看

鴨綠川に秋たけて、征衣ふく風膚寒し、すゝめすゝめ我兵士、すゝめすゝめ我乘る駒、この川一つわたしなば、この岸一つこゐゆかバ、敵の死守せる奉天府、またゝくひまにとりつべし、
折しも海風ふきおくる、大筒小筒のそのおとは、旅順口の戰ひか、渤海灣のあらそひか、つゞけ〳〵いざ兵士、いざとゝつゞけいざ兵士、八重の雲霧かき分けて、共よおがむる北京の月、
天地のあらむそのかぎり、日月てらさむその極み、我大君の大みいづ、かゝやかすべき時は來ぬ、青雲たなびくその限り、白雲おりふすその極み、我日の本の御光を、かゝやすべき世となりぬ

○捷報來

千瀾万濤樓主人

捷報來れり捷報來れり、
わが海軍の大捷報。
平壤のいくさに勝ちし陸軍の、
その捷報をきゝしより、
またれ〳〵し海軍の、
大捷報は西海の、
波うちて來りけり。
我艦隊の遊擊軍、
敵やいづこと白涙の、
立出でゝ遠く見渡せば、
大孤山、名におふ沖のそのあたり、
三つ四つ二つ敵の艦、

うかぶも見ゆる薄煙。
先に進みし偵察の、
我艦よりの信號に、
敵は出でたり北洋の、
艦隊そろひて十四隻。
いつか〳〵と嚴島、
敵をまつ島橋立の、
待ちよ待ちたる定遠も。
鎮遠も在り其中に。
威海衛、衝きしも汝を誘かんため、
旅順口、のぞきて見しもその爲ぞ。
よくこそ來つれこの沖に、
いざ一戰を試みて、

我海軍のたぐひなき、
力見すべしいざ來れ。
沖津白波音たてゝ、
互に向ふ海原よ、
はや砲聲の轟きて、
大海戰は始まりぬ。
とゞろく砲聲天をつんざき、
さかまく大浪海を震はす。
すさまじきいくさ程おくゝ、
沈めし敵艦はや四隻。
打たれて火をや出しけむ。
燒けたる艦も二隻あり。
はては戰ふ氣色おくゝ、

列を亂してちりぢりに
さして行く方は威海衛、
亦ものがるゝ龍のかげ。
黃海の夕風さゆて、
白波ようつる入日の影赤く、
勝を祝ふか帆柱よ、
色勇ましき大御旗。
我海軍の捷報は、
かくて來りぬ西海の、
涙うちこゆてはるぐーと。
千門萬戸軒ごとに、
日の大御旗かゝげつゝ
祝ふそうれし大勝利、

天皇陛下萬々歳、
日本海軍萬々歳

○大孤山沖の戰

田村幸子

豐島灘の戰よ。痛く破れて夏ながら。寒氣立ちぬる敵艦は。遼東灣内おくふかく。逃れひそみて影をすら。かくしゝものを如何でかは。今日とていそぐ死出の旅。十六艘をあとさきよ。連ねて進む大孤山。沖の波さへものすごし。

折からこゝに偵察の。わが軍艦はかくと見て。すはこそ獲物こざんなれ。おつとりまきて打ちひしぎ。目よもの見せてくれんずと。はやりいさんで奪さや。旭の御旗ひるがへし。十二の軍艦しづ〳〵と。戰列つくりて待ち構ふ、その雄々しさや如何ばかり。

敵にもさすが耻を知る。ものはあるらし逃げんとも。なさで乍ち方向を。轉じ開きて戰闘の。序列とゝのへ砲門の。口をひらきて進みよる。こゝ一瞬の名殘とは。知らで勇むよ水兵の。面影水にうつろひて。憐れにもはたけあげなり。

敵の打ち出す一發を。空よはじかせわが艦の。右舷の砲はなりにけり。こゝにいくさは始まりぬ。玉は霰ととびちがひ。ひゝくつゝ音百千々の。雷一時にあるかの如し。硝烟空を蔽ひて。照る日の影も朦朧と。あやめもわかぬすさまじさ。大海原もおぞりたち。そぎたつ空も崩れさて。一度よ落ちんばかりあり。

折りしもあれや我旗艦。松島號のうちいだす。玉はぬらひをあやまたず。敵の來遠名の如く。遠く來りてまつ先よ。底のもくづとなりはてぬ。忠勇無比の兵士等が。勇みたちたるかちどきの。音は天地よ震動し。またその鳴りもやまぬまに。又も一艘二三艘。つゞきてくだけ轟然と。まつさかさまよ覆へる跡はと見れば水の泡。其上にこそ渦まけれ。

始の程ぞ軍艦の。かずも頼みとなりにける。今は氣も落ち躰すくみ。こゝかしこよと入り亂れ。浮足立てゝためろふを。前と後よかけ散らし。左と右よ追ひ迫り。艦舳舵楫の嫌ひなく。波をけたてゝ突き崩す。白き降旗を立つるあり。焚けて自ら沈むあり。敵の提督丁汝昌。身は寸々よ飛び碎け。水の泡とぞ消えにける。底のもく

づのうら影に。憐れ如何なる夢や見ん。
かくて日も早や入相の。鐘にはあらぬ大砲の。音のすさまを覗ひて。命から〳〵逃げ出だす。敵艦やらじとしばらくは。後を追ひかけ進みしが。痛くな追ひぞ同胞よ。窮鼠却つて猫を食む。古きためしもあるぞかし。勝つて兜の緒を占めと。號令かくる司令官。十二の軍艦一列に列ひてときをあげにけり。夕日ようつる海の水。なびく旗手の色さゑて。日本島根の御光は。支那の大海よかゝやけり。

○大孤山沖の海戰

讀人知らず

一

煙を立てゝ行艦も
今日は海上おだやかに
疊の上とあゆみつゝ
甲板上にものがたる
時しもひるの中空に
太陽かゝやき照わたり
きらめく涙のをち方を
過ぐると見しは浮雲か
雲かとふたゝび彼の方を
見遣ればあやしいぶかしや

二

兩眼鏡を手よとりて
はるかあなたをうち見れば
かれにも煙をふき立てゝ
來たるはまさよ敵の艦
軍艦あるぞ軍艦ぞ
涙の浮寐の夢のまも
かしこの山の陰なるか
こなたの陸の入江かと
とく逢ふ事をたのしみし
軍艦なるぞいざやそれ

三

先にたちしは定遠か
つゞくは鎮遠靖遠か
こなたも砲門うち開き
旗艦の旗に氣を附けよ
すでにあなたに發砲の
音はげしくぞ成にける
かくれはせじと色のきて
信號まつや松島は
艦進めよと命じける

四

艦進めよと命じける

退くてふはるぞしらぬ
陸よてあらば駒の上
當りて碎けんものゝふの
艦と艦とのへだゝりも
砲丸左右よ降そゝぐ

五

今や三千メートルの
打てよ大砲機械砲
皇天煙ようづもれて
ひゝき合たる吶喊の
其たゝかひの中の瀬を
大和ますらを時きぬと
海路はかくて玉よそひ
奮ひ起りて立むかふ
次第よ近くなりぬれば
楯は此胸この躰ぞ
近きに進みぬいざや打て
砲聲最中に成にける
涙よ轟く砲聲よ
こゑよ大地もくつがへる
立めぐれるは西京丸

六

軍令部長聲高く
われこゝよ在つはものよ

きたゐき振舞おすなかれ
それも物かは進めやと
聯合艦隊これを視て
かれは假なる運送船

七

おくれをとらは恥多く
禦げよ進めよ擊てよやよ
パッとたつたる煙の中
たしかに致遠は沈めしぞ
經遠平遠燒ぬるぞ

八

あはれあやふし西京丸
秋の木の葉と散失ん
大雷一時に落かゝる
煙をついて進擊す
あはれかの艦うたせまじ
われは名高き軍艦ぞ
うたれ沈まば悔多し
うちしきりたる砲丸よ
ほのほの見ゆるは何の艦
たしかよ來遠は沈めしぞ
なほ擊沈め燒き盡せ
かぢをたゝたる捨小舟
其時かなたに水雷の

發射再びなすといへど
きたひし心くろがねの
敵のあはひをのりぬけつ

九

あとには戰なはすゝみ
勝利ます〳〵加はりぬ
かよわき艦も定遠の
かけなやましてわれも亦
功名手柄幾世にも

十

火は定遠よあがりけり
月はのくらくさし出でぬ
ちり〳〵逃ぐる敵艦の
艦こそかゝれますら男の
ふねよりつよく末遂よ
列をはなれて行過ぬ

すゝむよつれて我艦の
中にも赤城は六百トン
八千トンをめざしうち
こゝに折れよしますら男の
涙よひゞきて音たかし

萬歲うたふ艦のうへ
心やたけにはやれども
行へはそれと白波の

立居も見ゐぬ甲板よ
かへせもどせとよばふなり
かへせもどせとよばふなり

○海洋島邊の戰よ我海軍大勝利を聞て詠る歌

梅園寅清

あかぬますら男聲高く
高麗國と諸越國と、いむかへる青海原の、たゝ中の海の眞なかに、日の光輝やく御
旗、日の御旗高くふし立、軍艦さはへるはしに、ことさへく唐のこきしか、加羅國
の旗おしたてゝ、軍艦よせくるからよ、增荒男は雄たけひなして、つらなめし火筒、
はなては、かれよりも筒さきむけて、あひうちにあふはしに、のりなへしゐみしか
ふね、軍艦四つは沈めつ、軍艦三つは燒つる、かくしあれはかはねそ水つく、のこ
りにし五つの船は、潮けふり立のまかひよ、おのもく逃かくろひぬ、そこ故よ國
の御稜威そ、雷のとゝろく如く、電のかゝよふなして、千萬の國といふ國に、ゆき
とはらまし、

○艦長戰死

千瀾萬濤樓主人

海洋嶋邊波荒れて、
大快戰は始まりぬ。
我海軍の實力を、
世界に示さむ時ぞこれ。
敵はそろひもそろひたる、
北洋艦隊十四隻。
その噸數を比べても、
不足はあらぬ好敵よ。
沖津白波音たてゝ、
寄せ來る艦をことごく、
うちて沈めて黃海の、
海を塡めてむ。

いざやうて、敵の旗艦を定遠を、
それだにうちて沈めなば、
艦隊亂れてたちまちに、
敵は敗れむ敗るべし。
うちて碎きて十四隻、
殘る艦なくうちしつめ、
我海軍の實力を、
世界に示さむいざやうて。
我砲彈に碎けずば、
敵にあたりて我艦も、
共に碎けてこの海の、
藻屑とならむいざやうて。
號令の聲いさましき、

ブリッヂの、あたり掠むる彈の音、
今迄ありし艦長は、
見ゆずなりけりその影の。
如何よかしけむ艦長は
うてや碎けの號令を、
士卒の耳にのこしつゝ、
影だに見ゆずなりにけり。
我艦長をうしなひて、
勇氣いやます益荒男の、
魂こめてうちはかつ、
彈に碎けぬ艦やある。
海を震はす砲聲に、
たちまち沈む三四隻。

艦隊亂れてちりぢりに、
又もよげ行く威海衛。
支那の力とたのみつる、
北洋艦隊うち取りて、
黃海は、我海軍のものとなり、
渤海の、出入も自由になりけり。
一擧直ちに天津をつき、
太沽の城をばおとしいれ、
北京城門日の丸の、
旗立てむ日も近からむ。
千古未聞の海戰に、
千古未聞の大勝利。
榮ある戰の討死に、

榮ある名をばのこしつゝ、
征清史上艦長の名、
特筆大書せらるべし。
武士の赤きこゝろの著く、
赤城の艦の名と共に。』

○我海陸軍の大勝をきゝてよめる歌

八疊庵主人

大君のみことかしこみ
さひつるやからの醜男を
海原は沖にあぎさよ
日の御旗風になびかし
雨のごと霰のごと
はのはなす煙の中も
掛巻もあやにかしこき
日の本のますら武男は
逐やらひまつろはせむと
陸見れば山べよ野べよ
つるぎ太刃うち向ひつゝ
ふる亂る矢玉の下も

を心をふるひおこして
うちしきるつゝの響に
むら肝の心まとひて
水鳥のねよもをちつゝ
たてなめし楯もつるぎも
いちはやくすてゝ逃れぬ
のる駒の手綱ゆるへす
もろこしのもろき國ちを
打ひしきまつろはせつゝ
君が代をはやくうたへや

はしりゐのかへりみせぬを心よて
すゝみにすゝめやまとますら男

をゝしくも勇みすゝめば
さ蠅なすさわく醜男は
木の葉ちる風の音にも
まがねもて造れる艦も
わたつみの海よ陸ぢよ
しかはあれと心やすめす
はしりゐの疾くすゝみて
朝鳥のいでたつさきに
日の御旗高くかゝげて
やまとますら男

○陸軍の勇擊　海軍の猛戰

逸見仲三郎

天皇の勅かしこみ、妻子をら家をら忘れ、命をも身をも捨てむと、武士の物々しくも、勇士のはやりにはやり、日章旗空を覆ひて、荒山をい越え渡らひ、大軍旗波を照して、荒海をい行き走らひ、海陸分れて進む日本の大皇軍は、支那海の八重の鹽路を、韓國の八の大道を、戰の衢とかして、征むる手よいかで勝つべき、彼の國の軍人らが、取建てし堅き本城も、沫雪の蹴散され、備へよし鋼鐵の艦も、海底の藻屑とせられ、支へかね守らひかねて、ひけ鳥のひけ手取りけり、楓葉の散りて去よけり、このさまを見聞きせるより、殘れりし軍の伴は、風吹けは敵や寄する波立ては仇や來たると、おそれつゝ港よ隱れ、おちけつゝ疊よひそみ、清の爲死かい死かむと、勇しき利心あらすかりよけるかな

○皇軍の勝を祝ひてよめる歌

高島茂秀

かけまくも綾よかしこき現つ神吾大王諸越のしこの唐國はき清めやはしまさむと神なからおもはすかへよふとしかす都をかきて御心を廣島かたの天放る遠のみかとにはろ〳〵にいてましたまひ御軍を海ゆも起し御軍を陸ゆも起しいやすゝめ進めたまへば武士の軍武男は丸はちく火筒とりもち燒刃とき小太刀とり佩大御稜威かゝやかすへき此時とをたけひなしていや遠く出立ゆきぬそこをしもはかりしらすや唐國の醜のたふれる海路ゆもせめてし來ぬれ陸路ゆもよせてし來ぬれ青淵にすむといふ龍の天雲にかけらふかして大野らよすむとふ虎の吹風にうそふくなしていとみつゝあらそひぬれはせめよせしこのたふれら筒とりて打むかひしも太刀とりてたちむかひしも末遂よたむかひかねておのも〳〵逃さまよふを勝さひよさけびかゝひ追しきてきためすてゝき追ふせてはふりすてゝき風の音の遠き昔ゆ細矛千足の國はいさみたる武き皇國と久堅の天よりをちの外國の人のこと〳〵かしこきや吾　天皇の大稜威仰かさらめやしぬはさらめや

○吾軍清國の仇と戰ひ大よ勝たりと聞きて よめる歌幷短歌

海上胤平

味凍の綾に恐き天皇の任のまに〳〵敷島の大和の國の武士の丈夫猛男かことさへく

唐とふ國のこにきしの醜の軍を火筒もてうちきためむと太刀とりて切屠らむと駒なへて陸路ゆせめ艦なへて海つ路ゆせめひたせめよ攻戰へば燒太刀の諸刃にもふれ大筒の彈にも碎け備さへ刎さへ亂し大方は命死にてきたま〳〵にいき遁れしは風よ散秋の木の葉のちり〳〵よ逃かくれつゝ立むかふ心もしらにせむすへのたときをしらにをちこちにわなふきをらむそこよしと誰かいさまぬ追しきて唯ふみころせ恂憐吾丈夫猛雄のいやたけき國の御稜威を天の下に輝すへきときそ此時

短歌三首

天皇は神にしませは諸越の
からの軍もうちきためけり
海の軍陸の軍涙風の
あらふる仇をうち鎭めけん
よしもなき軍おこしてゐれからと
國をはろはすかそのときしら

○聞我陸海軍大捷作歌　本多晋

露霜の　秋の最中よ　ひく駒の　名よかよひたる　高麗人の　はだし解むと　皇の
我大君の　かしこくも　さとしたまふを　ねもころよ　いさめ給ふを　ことさへく
もろこし人の　かたましく　背きまつれば　御軍を　くぬかよ海に　つかはして
こらしまさんと　のらします　みことかしこみ　物部の　八十伴のをは　君かた
め　身もたれしらず　海ゆかば　みつくかばね　山ゆかば　草むすかばね　玉きば
る　命をしまで　打むかふ　增荒猛男よ　醜男らの　いかで勝つべき　ますかゝみ
ふたゝびみたび　さてめられ　打はふられて　山邊には　ちしほの紅葉　色にい
で　まだき染なし　海邊には　八重の汐ぢの　沫となりて　はやく消えつゝ　日の
御旗　ひかりまばゆく　もろこしの　都へてらし　こぎしらも　おそれまとひつ
大みこと　のらすまに〳〵　かしこみて　なひきまつろひ　天つ日の　かゝよふき
はみ　海の外の　國てふ國も　皇の　君の御威よ　おさまりて　のどかにならん
時は此とき

○塞上曲

金子雄太郎

夢をやぶる、夜半の喇叭、一聲二聲
將軍の、髯さかだちて、駒いなゝき、
　劍とり、秋を蹴りて、起きあがる。
　命を待つ、猛兵八千向ふやいづこ。
氣はあがり、心をどりて、敵のかた、
　見あくれば、九連城の月白く、
　見ふろせば鴨綠江よ涙高し。

○軍中曲

半月仙

秋もやゝ
更けし文月の望の夜
駒打のばせ〳〵
そゝろ昔ぞ忍ばるゝ。
長白山の頂よ
槊を横へながむれば

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

夢ならん
いざ去らばと故郷の
親しき水よ背きつゝ
渡り來にしも月一つ
哀れ故郷の人々は
我母、いかに妹いかに。

思ひやる
さらでも弱き母御前や
この秋の夜をいかにせん
結目あらき草の戸の
半ば頽ちにし草屋根の
脊戸の七草咲きぬとも
戀しき山よ打わかれ
池の御旗をしたてゝ
越ての前となりにけり
如何にか月日を送るらん

まだ年若き我妹の
夜寒の風や寒ぶからん
隙もる月や身よしまん
誰か摘まゝし我をらで

裏の鈴虫あくとても
叱！

かぞましや
君の軍の兵士が
家の事〻何かせん
我はたゞ
君の幸をぞ祈るなる
我身よ入りし惡魔去れ
我はなかじな武夫が。

さりとても
家路よいます母御前よ
我は君等を忘れじな
一時心を鬼よして
誰か捕へん我をらで。

君こそ思ひ奉つれ
家は兎も角もあれ
國の幸をぞ祈るなる
我は思わじ家路をば

侍づきまつる我妹子よ
只武夫の悲しさよ
君等を思ひこはぬのみ
そは武夫の常にして
流す涙はもたざれば

我眼は涙みたず共
女の如くさめ〻と
流す涙はもたざれば。
叱！叱！
我は思はじ泣くまじと
未だ口の端を消へざるに
さまで未練の我ぞとは
若も未練の我ならば
死ね〻こゝの虎の餌よ！

＊　＊　＊

りゆう、りゆう、發矢、
鞭打揮ひ見上ぐれば
星の光も消ゆるまで

今云ひたりし言の葉の
又も思ふは未練なり
思はざりしか我ぞとは
さまで未練の我ならば

＊　＊

蒔繪かきたき月一つ
いと清らかよ照り渡る

見をろせば
山の麓に眠りけん
たゞほそ〳〵と陣のかゞり火。

あな哀れ
彼處に眠る人々は
すぎし成歡の戰よ
碧蹄館の夢かそも
あゝ我勇ましき兵士等
勇ましや
京城ははや乘り取りて
今宵一夜を此山よ
進み進むで支那に入り
快き戰一つして
陣のかゞり火細々と
如何なる夢をか結ぶらん
あの勇ましき有樣か
曉近しいざや起きなん。
此國人は敵ならず
曉まちて明けんよは
豚尾人種を切りまくり
ひた押しに押し押進み
いざ乘取らん北京城

只一息に乘取らん
面白や
昔加藤の清正も
おなじく小西の行長も
所はいづこ白雲の
さ[illegible]れ共此處に明日は又
此望の夜よあふものは
清正行長何かあらん
彼等を一足ぬきんでゝ

＊　＊　＊　＊　＊　＊

折しもあれ
一齊吹き出す喇叭の聲
天上天下なり轟ひて勇ましゝ。

此の望の夜よあひよけん
此の月の夜よあひにけん
新羅の國か高麗にてか。
支那よ入らんと陣取て
我等數萬の兵士よ
我等は一足拔き出でゝ
明日は入らなん豚の國

草枯れて
秋風高く馬肥へぬ
いざや進まん〳〵、

鐵幹

○軍中月

平壤府、大同江、
野はひろし、流れは長し、
見れば皆、幾日もたたぬ新戰場。
すさまじきいくさ一と揉み程もなく、
清兵三萬わしらせて、
秋は半となりにけり。
よしや今宵は勝利の祝ひ、
かねて三五の月の宴。』

旗の手よ、秋風たかく吹きわたり、
幕の上に、夕露しろくおきわたす。
をり〳〵清く聞ゆるは、
誰か玉章の雁ならむ。
故郷の、三笠の山は見ねども、
天の原、名におふ月の影あかし。
あはれ世は、泰平二十年打つづき、
大宮人の袖にのみ、
やどさむ月と思ひしを、
槊とりてながむる今宵もありけりな。』

おもしろき今宵の祝ひ、
おもしろき今宵の月見、

我營の、十萬の將士いざもろとも、
飲めや謠へやこの一と夜。
故郷人がはるばると、
眞心こめておくりたる、
うまき伊丹の酒もなり。
肴よは、こたびのいくさに斬りたりし、
血に染む髑髏五千級。』

佐々木信綱

○弓張月

かたしく鎧のそでまくら
露をよすがよかげやどす
月のひかりもかたぶきて
なくころはそしくつゝ虫
いざやつはもの起出でよ

あだや間近くよせくらむ
夜露のつゝむすゝきはら
いなゝくこまの音すなり

千瀾万濤樓主人

○洋上月

見渡せば、
雲と波と、一つ色なる海原の、
いづこなるらむ海洋島。
天を裂き、海を震ひし砲の音、
今はあとなくなりはてて、
波路の末よさやかなる、
月は出でたりはるゝ〳〵と。』
今日のいくさようれしくも、
北洋艦隊十四隻、

その半までうち沈め、
我には沈みし艦もなく、
今宵ならびて涙の上に、
居待の月の影見つつ、
君が代の歌うたふこそうれしけれ。』
大みふね、浮ぶは昨日のままあれど、
柱折れ、舷やぶれ、
ところ〳〵よくれなゐの、
血しは流れしあと見れば、
ひるのいくさのはげしさも、
今こそ思ひ出でらるれ。』
海ゆかば水漬く屍とも共よ、
昨日はうたひし我友の、

今日のいくさにはまれある、
討死せしもうらやまし。』
思ひかへせば何事も、
夢なりけりな涙まくら。
今宵あき、命としらで故郷に、
月見つゝ、まつらむ人もあるべきに。』
金波千里、月影あかき海原の、
いづこのはてかあつかしき、
わが故郷の山なるぞ。
今日のいくさを告げやらひ、
使もがあとがなめやる、
み空に一つら雁の影』

○海上宴

千瀾萬濤樓主人

海原に、つらなりうかぶ、大艦の、
帆柱の、上にさやけき、月のかげ、
明日はわが、屍の上や、てらすらむ、
うたげして、今宵ながむる、月の影。』

日本の岸をはなれて、はや三月、
わだの原、八重の汐路を、東西、
沖津波、さわぐあらしに、ねざめても、
戰ひの、夢はやぶれし、事もおし。』

月あかく、大空青く、涙白し。
汐風も、音せぬ今宵、いかにせむ。

あすしらぬ、いくさの海の、涙むしろ、
うたひつゝ、今宵一夜い、あかしてむ。』

昨日こそ、撃ちても見しか、威海衛、
そのあたり、涙をけり行く、龍はなく、
渤海の、空よ一すじ、くろけぶり、
吹風よ、なびくと見えて、消えよけり。』

あはれ〳〵、高麗の海べの、たたかひに、
魂ひを、まづ奪はれし、ひびす艦、
渤海の、外に出でずば、いかよせむ、
ふもしろき、いくさもせむと、待つものを。』

誰かいふ、ゐびすの艦は、大なり。
誰かいふ、ゐびすの艦を、堅しとは。
くろがねも、はがねもくだく、荒みたま、
敷島の、大和だましひ、人は見よ。』

定遠の、大きさわれに、まさるとも、
鎮遠の、堅さはわれよ、まさるとも、
敷島の、大和だましひ、うちこめて、
わがはなつ、彈に碎けぬ、艦やある。』

いざあすは、先づ旅順口、うちやぶり、
渤海の、その奥深く、攻め入らむ。
今宵この、涙のむしろの、大うたげ、
いさましく、くみもかはさむ、一杯を。』

音樂の、聲こそさゆれ、夜半の月、
ふくるとも、くみかはしつゝ、うたひてむ、
海ゆかば、水つくかばねと、かねてより、
大君に、さゝげまつりし、此いのち。』

音樂の、聲もしばらく、やみし時、
雲出でて、月かげくらく、涙立ちぬ。
おもしろし、夜半の荒涙、さかまくは、
その中よ、明日や埋めむ、わが屍。』

凱歌の、聲いさましく、謠ひつゝ、

音樂の、ふしおもしろく、歸らずは、
艦の上よ、ますら武夫の、うちならび、
月見るも、今宵かぎりぞ、大海原。』

いざあすは、先づ旅順口、うちやぶり、
渤海の、その奥深く、せめ入らむ。
凱歌の、聲をきかずば、空の月、
明日はわが、屍をてらせ、浪の上。』

○兵士の妻

黒田如雪

一　山里の夜

木の間をもれて二つ三つ、微かよ見ゆる燈を、しるべよいそぐ仙人が、きこりの歌をうたふなる、聲さへ澄みてきこゆなり、谿間をもるゝ石清水、草間にすだく虫のこゑ、瀬をはやみゆく水の音、あはれも深く遠近の、軒端にちかくきこえゝ、更けゆくまゝよ誰やらん、衣擣つ音も山家よは、いとゞあはれをそふるおり、

叢深くわけいりて、木立の蔭に賤が身を、しのぶ浮世の詫住居、訪ふ人もなき白屋の、影も小暗き灯よ、針のはこびもまゝならず、縫ひたつ衣に追懐の、おもひの數をぞ歌ひける、

「絶えなんばかり身をせめつ、心をせむる憂事は、うつゝか夢かみぢか夜の、夢とみしこそ迷ふれ、迷の雲のむらだちて、はるゝひまなき吾こゝろ、おなじ迷の友あらば、打もあかしてもろともに、憂をはらさんよしもがな、

夢かとばかりおどろきし別にのぞみ吾夫が、目もと凛々しく姿さへ、つねよかはりていかめしく、「皇國の爲と思へよ」と、遺し給ひし言の葉の、今おほ耳よのこりつゝ、迷の闇を照らすなり、皇國の爲と野よ山よ、起き臥す君が衣手に、おつる白露願くは、霜ともなりてとけ難き、わが心根を傳えてよ、

旅だち給ひし其日より、はや七日をば打過ぎぬ、うつゝか夢か短夜の、夢とみしこそ迷なれ」、

さびしきまでに冴えわたる、月の光に獨寐の、さびしき夢やさめにけん、時はなるゝをがらすの、啼音もすごくきこえつゝ、空よは秋の月のみぞ澄、

二　夜半の秋風

落葉をみだす秋風よ、驚き覺めつ獨寐の、さびしき閨の灯を、かゝぐる手よも嬰兒の、口よ乳房をふくませつ、見つむる顏よはろ〳〵と、落つる涙のしづくをば、手もて徐かに拭ひけり、

おもひぞまさる秋の夜の、いとゞわびしきおもひ寐の、思みだるゝ小夜なかに、笹原ごしよ木傳ひて、あしのまろやを吹風の、音もいよ〳〵凄まじく、脆き女のはらわたの、ちぎるゝばかりあるゝなり、

吹入る風よ灯の、光はうせてもの思ふ、人のこゝろを吹あらす、闇路の風の音すごし、

三　朝露

霧よかくるゝ山端に、殘の月の影うすく、わけ行く草よ虫の音の、たえ〴〵のこる朝まだき、夫がかたみのいとし子の、寐いりしまゝを背負ひつゝ、叢そよぐ朝風に、こぼるゝ露を人の世の、脆き命と悟りつゝ、聲しめやかよ朝露を、うたふもいとゞあはれなり、

「脆きは露の命かも、花に蕾よ草の葉に、むすびし玉の姿さへ、そよ吹く風よはろ〳〵と、碎くる末こそはかなけれ、

脆きは人の命かも、榮華の夢もとく過ぎて、月雪花のながめさへ、時にうつらふ世のならひ、賤が伏家も樓も、おなじ浮世の詫住居、鍬とる賤も貴人も、おなじくもろき野邊の露、つゆの情よはだされて、浮世の夢のさめやらぬ、人の末こそはかなけれ、

同じく脆き露ならば、荒野の草に長き夜の、眠にしづまんそれよりは、世にも人よもめでらるゝ、花の櫻よ一時の、夢もろともよ散りてこそ、露の心もめでたけ

れ、露の命もたゝとけれ」、

身よしむ風のみどり兒が、淡紅の頰をうつを、母はいとしく思ひけん、草葉の露をふみわけつ、おのが伏家よ歸りける、

四　いとし子

思もしめる雨の日に、とけぬ思よ堪え難く、夫がかたみのひとり子の、寐顏見つめてさめ〳〵と、おとす涙は夫おもふ、思の雨とぞしられける、雨はいよ〳〵降まさり、はげしき風もくはゝりつ、おつる枯葉のはら〳〵と、窓うつ音よ嬰兒が、なく一聲よおどろきつ、乳房かひなで嬉しげに、笑を洩らすぞたちちめの、深き情としられける、

骨たくましく肉づきて、凜々しき目よは勇しき、心をしめすみどり兒が、右手を乳房にふれつゝも、さも嬉しげに打笑むを、母も諸共笑ひつゝ、いとうれしげに見詰めけり、

五　おとづれ

淋しき秋の夕間暮、細き燈かきあげつ、思よ絶えぬ音づれの、深きこゝろを歌ひける、

「里には遠き山家よも、過ぎゆく雁の一聲は、朧月夜にきゝしかど、皇國の爲と勇みゆく、ますらたけをの音信を、誰にたづねんよしもなし、今はいづれよ征衣、長夜の霜を身よしめて、露の宿よねおきする、ますらたけをの音信を、誰にたづねんよしもなし、

すめら御旗の飜る、高麗の山風心あらば、我が日本の丈夫が、霰の丸や血の煙、ものともせずよ玉や散る、日本刀を打ふりて、進みてやまぬますらをを、賤が軒端に吹きあらす、風の音よも傳へてよ、

錦旗の下に斃るゝは、我が武士の譽あり、しづがこの身も日本の、ますらたけをに百歳の、契かはせし上からは、あはれかたみの男子をば、いとも勇々敷はぐくみて、皇國の爲よ賤が身を、献げし猛き武士の、赤き心は後の世の、皇國の書にとゞめなん、皇國の人にしめさなん、

伏家をてらす灯は、くづれし壁の隙洩れて、あかきこゝろの紅葉と、賤が女のまごゝろを、宵々ごとゝ照らすなり、

○生別

三年のむかし我せこが、
日數讀みつゝ歸る日を、
いくさ起りてわがせこも、
はるけき道を營所迄、
こゝろ痛めぞ、この旅の、
やがて蹟も名も立てゝ、
こゝろ安げにせはいへど。
いまの逢瀬を暇乞ひ、
思へば胸も塞りて、
切角いさめるわがせこを、

湖處子

兵よめされていにしより、
待つる甲斐もあられもなき、
支那朝鮮へゆくときゝ。
いそぎてせこを尋ぬれば、
敵はよわしと聞からに、
歸り來む日を待つべしと、
妾が思はさにあらず。
けふのわかれを別ぞと。
云ふべきこも知らねども、
なかすは女の愚痴なりと、

しばしば背ふりむきて、
君が目出度門いでに、
花々しくもいくさして、
さはさりながら君と我、
營所をいでゝゆる〳〵と、
といへど軍法きびしくて、
聞くゝ悲しさなさけなさ。
持て來し肌衣とりいだし。
妾も君がわとゝめて、
女の身なれば甲斐もなし、
妾なりとも見そなはせと。
たばしる涙とめかねて、
軍人たらん身はつらし、

わきくる涙かみしめつ。
いましき涙ははなむけに、
かへります日を待ぬべし。
わかれて月日すぎぬれば、
つもるはなしもせまほしく。
外よいづるをゆるさじと、
これも浮世とあきらめて、
こゝろを任す世にしあらば、
いづく迄もと思へども、
せめてはこれを身よそへて。
わたす我身も受くる身も。
ともゝ袖をぞしぼりたる。
その妻たらむは猶つらし。

このあさぼらけありあけに、
今一度と思へども、
大軍營所をうちたてば、
いづれとがせと見えわかず。

羽塲愿一

○わすれがたみ

坊は好ひ兒ぞ何を泣く。
そなたの父は平壤の、
過ぐる激戰よめざましき、
武士のいさはをたてしのち、
降りしく彈丸に忠死して、
はまれをのこしたまひしぞ。
月日ながれて坊もまた、
武者ぶり強き人となり、
父の心をうけつぎて、

君の御ため國のため、
あだなす敵を攘へかし。
母が笑へば坊もまた、
何を無心にはゝゑむぞ、
笑ふなかよもこの母が、
眼よりある涙は見へざるか。
思ふも今はあだなれぞ、
草葉のかげの我夫と、
契を結びしその日より、
鴛鴦のふすまを餘處よ見て、
むつびあひしも二年の、
短き夢をいのちにて、
醒ひればつらし秋の蝶。

戀しき人よさきだゝれ、
何をたのみよこの我は、
來ん春秋を送るべき。
軒端にすだく虫の聲、
雲にかくるゝ夜半の月。
世は汝のみの憂世かは。
思ひつめては女氣の、
はり裂くばかり波たてゞ、
罪なき坊の顏みれば、
千々のかあしみ消へ失せて、
また世の人にかへるなり。
夫のいさはは我がはまれ、
何を女々しくくやむべき。

折々ひさごの齒を見せて、
頰よ嬌泉を片よせて、
夢みつ眠るみどり子の、
姿を見れば面ざしの、
夫よ似たるもうれしけれ。
はやくこの兒をはごくみて、
日本武士のひとりぞと、
凛々しきすがたを見るならば、
いかに樂しきことならむ。
のこりし坊もこの母も、
するどき武士の妻と子ぞ、
あゞて今日をば悲しまむ。
心よはしといさめども、

落つる涙をいかませむ。

○豫備兵　近衛師團　松琴生

二人が中のいとし子を
皇國の爲めに勇ましく
かゝる別はかねてより
あかぬ名殘の忍ばれて
心のこして立ち出る
操の色は失せねども
やよ我夫よ身をすてゝ
君と國とに盡してん
海路わたりて外國に
ほまれとゞむる此門出
動かじものと定めたる
家ゝ殘して我夫は
今日ぞ都へ上るなる」
心定めし身ながらも
袖ゝ涙の露しげし」
門邊の松も呉竹も
さびしがはなる此夕」
家を思はずひたすらゝ
稚子は育てん心して」
身は消るとも消ぬ名の
思ど袖のしめるなり」
心も今はゆるぎ來ぬ

夫は旅路ゝ上るなり
「跡をたのむ」の一言も
うるむ目元を見たびに
「父樣早う」と稚子は
笑顏つくりて送るなり
祝ひながらも人々は
送る言葉もうるむなり
小川をわたり橋をこえ
小山の松はつれなくも

○太郎

君も君も、いざ列つくれ。
いくさごとして遊ぶべし。
我とゝさまは陸軍大尉、
名殘惜げゝ顧りみて」
心の底にしみるなり
身を切計り覺ふなり」
歸らぬ旅としらずして
袂ゝすがり手を取りて」
情にくみつゝもろ共に
濕りがちなる其風情」
ふりかへりつゝ登行く
姿かくしぬ我夫を』

鐵幹

時間の鐘の鳴るまでは、
豫備とやらにてこの三とせ、

家よかへりておはせしを、
母さま泣かせて行かれたり。
とゝさま都會へか、土産には、
よしや佳い兒ぞ、おとなしく、
優しき言葉のこしつつ、
母さまは、涙をがらにかけ出て、
死なば天晴功立てゝ、
生きば勇士と歌はれて、
母さまの、そのお言葉も終ぬに、
鎮守の森にかくれたり。』
なせとゝさまはいつまなき、
問へばはゝさまはゝゑみて、
よきとゝさまを持にけれ、

けさ何事のおこりしか、
サーベル買うてと頼みしよ、
母さまもろとも留守せよと、
馬に一鞭あて玉ふ。』
武士の妻、なよか未練を申すべき。
死ぬべき時よ死よ玉へ。
歸り玉へとのたまひぬ
早やとゝさまのみすがたは、

よき服つけ行かれしと、
太郎よろこべ、太郎こそ、
此母も、よき良人にこそ嫁たれ。

太郎よろこべ、よろこべ太郎、
受るやゝがて勇ましく、
こたびの戰の對敵い支那、
ひろき世界の戰場よ、
このおもしろきたゝかひよ、
撰ばれ玉へるとゝさまの、
かく言て、聞せ玉ひしその折の、
なか〳〵口よは盡されず。』
あはれいくさはおもしろきもの、
君も、君も、いざ列つくれ、
いくさごとして遊ぶべし。』

○機女

夕日をおひてゆくからす

とゝさまは、けさ俄なる徵發を、
師團さしてぞ行かれける。』
大日本の陸軍が、
今ぞ踏入る初舞臺。
一方の隊の長として、
そのうれしさは如何にぞや、
我うれしさも亦いかよ。

あはれいくさいうれしきもの、
時間の鐘の鳴る迄は、

槐園主人

こよひ何處よやどるらむ
梭をとゞめて見れくれば
そらには白雲立ちまよふ
おもへバ遠くいでましゝ
わが夫いかゞはすらむ
ありあれがはを渡れりと
きゝしは月のはじめにて
れとづれ絶えし九連城
夢より霜やむすぶらむ
あらしよさゆる戈まくら
織り出しては梭をとどめ
とゞめてはまた織り出ず
はそぬのごろも幾すぢの

糸よりしげくふるものは
夫戀ふなみだの夕しぐれ

かぞふれバ秋も半はすぎにけり
北よりかへる雁をしぞ思ふ

○廢征衣

大皷の音も打交り
それ樂隊の來れりと
昨日きゝつる平壤の
凱旋の曲いさましく
勝利のしらせ凱旋の曲
いくさの折のしのバれて
月かげくらき安城渡

かさしの花

ちまたに聞ゆる喇叭の音
子等は門邊よ出でよけり。
勝利を祝ふ爲ならむ
わが胸にしもひびくなり。
きくよつけつつ成歡の
忘られがたしわがせこの。
流を亂して進みゆく

ゆくてに敵の伏起り
進め〳〵とまつさきに
飛來る彈よはかなくも
山ゆかバ草むす屍
生きては歸らぬ我身ぞと
君の御爲ぞ御國の爲ぞ
その討死は惜しからず
今更思ふはをんな子の
愚なりとは思へども
牙山の城を打ちれとし
高麗の荒野の風寒く
こゝろをこめて作りつる
觸れずそのまゝ此箱の
しきりよ打出す銃の音。
劔をかざすその人は
堤の草の露とおり。
いくさに行かバ二度と
いひ〳〵てこそ行かれしが。
軍に出でしゆがせこの
惜からねどもいとをしや。
めめしき心われながら
思はでいかよ過ぐされむ。
北の方よと進みなバ
耳をもおとすと聞くからよ。
肌着は君のみ肌にも
中にこそあれ其まゝよ。

勝利を祝ふ音樂の
思ひ出でつつ悲しさを
北京れとして凱旋の
とりてをさめむ其まゝよ
子等は歸りて嬉しげに
喇叭の聲の勇ましさ
わが父君のいくさして
また樂隊は通るらむ
問へる我子を抱きあげ
功名あげて手柄して
あはれくるしやこの答
肌着は斷たバ斷たるべし
聲聞くたびにもわがせこを
いかにかはせん此肌着。
列いさましく歸るまで
誰が爲としもあらねども。
いま樂隊は通りたり
大皷の音のおもしろさ。
歸ります日も今日のごと
その日は何日ぞ母君よ。
そなたが父は父君は
功名あげて手柄して。
あはれかなしや此肌着
答はなよと答ふべき。

○わがせ

（上）

登美子

しこの夷をうちきため
凱歌の聲のいさましく
北京の城を乗り取りて
やまと男とことあげて
さはさりながら武夫の
面にきずは負ふとても
われさいはひよ凱陣の
をさなき子らも打集へ
高きいさをを顯はして
歸り來む日を待て暫し
城下の盟を果てむのち
歸り來む日を待て暫し
君よ捧げしいのちなり
背よ受けじてきの彈丸
群よまじりて歸りなば
語りあかさむ勝いくさ

もし幸ひのすくなくて
ますら武雄の妻なれば
父と母とをおぐさめて
ひとともならば心して
何はかく〳〵彼は斯と
情もこもることの葉を
栗毛のこまよ跨がりて
立ち出で給ひし面影は
目出たき君が門いでよ
戰死すともおれもまた
女々しき心あるなゆめ
いとけなき子を慈愛め
ゆめ敎をばをこたるな
殘る隈なくうちさとし
あとの妻子よ殘しつつ
戎ごろものいさましく
いまなほ現まぼろしに
涙見するはふきつぞと

堅く奥歯よ噛みしめて
思を乗せて行くこまの
遠くかすかと成まさり

しのぶとすれど眼は朧
足掻も早くいつしかよ
見送るそらに雲くらし

（下）

立ち出で玉ひし其折は
水無月半のころなれば
夢見る隙に日もたちて
きみは如何にと松虫の

土さくばかり熱き日の
恙おしやとおもひ寐の
小指を折れば昨日今日
垣根にすだく頃は來ぬ

心つくしよ寄るなみの
今日は何處よ移りたり

そのをり〳〵の玉章に
明日は彼處よ進みおむ

父母如何よますやらむ
幼きものやおひたつと

おん身に病あらせずや
情もふかし意もこまし

さむさ身よしむこの夕
ながむる空よ月たかく

おはし間近く端居して
雁がね遠くわたるなり

高麗の荒野よ秋たけて
草をしとねに片敷きて
戰爭のよはよ霜冴ゑて
おき添ふ露の隙さへも

夫の君如何におはす覽
石をまくらに寐ます覽
今夜のゆめや破るらむ
忘るゝ時とておかり鳧

朝のまぎよはら〳〵と
桐の一葉のそれあらで

散りくるものは秋風の
開け行く世の「新聞紙」

その「號外」と呼ぶ聲に
取る手遲と讀み行けば
先づは心のさわがれて
よよと計りよ身も寒し

たゝかひ勝ちて平壤府
味方は五百とあるよ附
てきの死傷い六千騎
もしやと思ふも涙よて

○月あかき夜小野里よ砧を聞きて　與謝野修

浪雲のうつくし背子は、皇軍の員にめされて、尻鞘の太刀をとり佩き、鷲の羽の負征矢をおひ、左丹塗の弓を手挾み、外日珠の黒駒にのり、寇うつと唐國かけて、艸枕旅立ちませり、留まれる吾は幣おき、天地の神を齊ひて、恙みなくささくいませと、時まねく乞のむはしよ、秋風の日にけに吹きて、このころは夜寒になりぬ、わが背子が解き洗ひ衣、櫃の中よ納めおきたり、己が背子はませとまさねと、今こそはわれも打ためと、眞十鏡清き月夜よ菅菰を庭よかきしき、砧を上よするおき、馴衣まくり手よして、手弱女の力のきはみ、卷かへしわが打音も、風の俱聞えも行くか、

獨寢にわが背の君か、旅のやどりよ
衣うつ手をたゆからす吾背子か
艸の枕のうけよおもへば

○秋の夕ぐれ　世外佳人

くさむす屍山ゆかば
このひと言を名殘よて
旅立ちましきから國よ
こもりゐるさへかくばかり
さびしき秋のこの頃を
つゆをしとねのくさ枕
世におもひなき法の師の
身にも哀はおぼゆると
ひとりさびしき閨の内

四月のさきよ吾背子は
彈丸の雨ふるから國に。
うみ山とはき異國に
鋭持背子や如何ならん。
嘆ちたりけん況てわが
夫まつこゝろ誰か知る。

續く日本のかちいくさ
聞よつけつゝ我背子の　身よは恙もまさずやと
夜半の夢さへ肉うごき　あり〳〵見ゆる幻しよ。
さめてかひなきしのゝめの　過しむかしの思はれつ
雞を恨むるあさぼらけ　しのび泣きしも幾度か。
袖かみしめてたゝ獨り
桐一葉ちるこのゆふべ　うき世を秋の風さみし
思ひせまりて見出せば　怨もいとゝ身よしみて。
千草八千草こほろぎの
さはいへあはれ武夫の　今は何をかおげくべき
つまの務はかくもあれ　草むす屍ぞ山ゆかば。
國の守りのわが背子は

○關のあるたよ住むる或やもめ、亡き夫の石碑の料よとて積みたりし黄金五十両を、こたびの征清の軍資の片ハしよだよとて献納したりと云ふを聞き其の心根や、如何おりけむと思ひやりて

みよしの

戸の間もれ來て　薄衣にそつと身にしむ　秋風は昔ながらに打ち靡く　薄尾花にそよぎつゝ　宮城野ならぬ庭の萩　去年見しまゝよ咲きよけり
ついれさせてふ虫の音よ　雁おき渡る夜もすがら　結ばぬ髪を　吹く風の心のまゝよまかせゝ　打ちし砧は今あれど　打ちなんこゝろ今はなし
隅田よ住むある都鳥　雨風あらくありとても　はなれぬ女夫中なるを　雨よさらされ日よてりて　心だになき枝なれど　連理に生ふと聞くものを
回りし來れば　我が夫と互みよ絞る涙川　柵らむ袖よ音づれし野分の風は　今朝しもぞ庭の梢を訪へど　絞りし人は返り來ず

雨ふる夜半の水雞よは　もしやそれかと夢さめて　妻戸おしやり眺むれば　こゝは
浮世の中にして　黒白もわかぬ其の中よ　芭蕉の音のみさそふなり
起きては思ひ寢ては見つ　寢でも見えつる吾が夫は　今はいづこよおはすらん　雪
霜ふらる冬の日に　さながら燒くる夏の日よ　待つ人ありや側らに
いぶせき家の習ひとて　碑さへも起てえぬを悔しみ思ひ　黃金をば五十ばかりしも
積みつるを　今はわが家に何かせん　いでや捧げん御軍に
あはれ我が夫聞こしめせ　御國ゝ今や言さえぐ唐國としも　御軍を開き玉へり　虎
の伏す哀れの國を助けんと　正しき道のその爲めよ
我が勇ましき武夫は　大君の詔かしこみて　或るは海路よ或は陸に　敵の舟をば
打ち沈め　敵の兵うちやぶり　赫やく功績いとゆかし
御國よ生れし上からは　いかでか仇にあらめやと　思へば悲しおのが身は　筒こそ
取りて戰はね　大刀こぞ執りて立たずあれ　窈窕女よしも我あれば
あないぢらしや我が夫よ　君のあの世に旅せしは　わづか三歳の前なるを　あはれ

旅路か御軍の　三歳の後にあるならば　三歳の前にあるならば
肩よは　よなふ村田銃　腰にはきもつ日本刀勇みいでたつ姿をば　門邊よ立ちて送
らんをあはれ三歳の後ならば　あはれ三歳の前ならば
日毎〳〵の新聞を　手よ取り持ちて指をりて　胸に赫やく我が夫の譽を待ちてあり
おんを　あゝれ三歳の後ならば　あはれ三歳の前ならば
筒、とりていでたつとのかなゝぬも

○雨後月

心ゝ匂ふ山櫻花　かさしの花

一　青葉茂れる窓の下　文よむたにもたへがたき
この水無月のあつき日を　高麗の荒野やいかあらむ

二　庭の梢よなくせみの　聲ききてさへあつき日を
かこつこのごろ玉ちらす　筒のひゞきやいかならむ

三　高麗の海べの戰ひに　ねびすの船をうばひつと
　きくはうれしく思へども　わかはらからやいかならむ

四　唐のねひすをうちはらひ　牙山の城を取りまきと
　きくはうれしく思へども　わかはらからやいかならむ

五　土もさけなむ水無月の　照る日の下にさらされて
　とゞろく彈丸のその中に　いくさやすらむはらからは

六　しほもよゐなむ此頃の　あつき海路にたゞよひて
　さかまくあみの其上に　いくさやすらむはらからは

七　草むすかばね山ゆかば　水つくかばねぞ海ゆかば
　すめらいくさにさきがけて　命はすてよますら男は

八　名さへたゞしきみいくさの　さきかけなしてわれもまた
　國の爲めに思へども　女の身こそかひなけれ

九　高麗の荒野やいかならむ　支那の海邊やいかならむ
　なかむる空に雲出でゝ　神なり渡る夕まぐれ

十　風にさばひて稻妻の　ひかりもすごく一しきり
　夕立つ雨のすぎゆけば　木の間に涼し月の影

伊良子暉造

○明月

内日刺、花の都のたか殿に、うま酒のみて、絲聞て、秋の長夜をよもすがら、浮る人も、日のもとの御國のみ民。

眞萩散、花野の露にぬれ〳〵て、筒とり持て、太刀帶て、秋の長夜をよもすがら、守れる人も、日のもとの御國のみたみ。

かくばかり、へだてある世をへだてなく、うかるゝ人も、守れるも、ひとつよ照らす、秋の夜の月の心やいかならむ。

○仲秋月

千里の外も、目に浮ぶ、

今宵の月の、さやけさよ、

かゝるならひの、村雲も、

今宵ははれて、秋高し。』

月よ向へば、何とおく、

あはれ催す、ものあるを、

まして今宵の、月見れば、

千々に物こそ、思はるれ。』

かさしの花

我大君は、玉しきの、

都出ましゝはるゝと、

大みこゝろの、廣島よ、

昨日向はせ、たまひけり。』

今宵の月を、津の國の、

神戸みなとの、みたびやよ、

みそなはしつゝ、ゐみしうつ、

いくさの上をや、おぼすらむ。』

高麗の荒野に、ゐみしうつ

ますら武夫は、平壤の、

堡おとして、岡のべよ、

今宵の月や、ながむらむ。』

支那の海べよ、ゐみしうつ、

ますら武夫は、渤海の、
奥ませめ入り、船の上に
今宵の月やながむらむ。』

大旗小旗、ちりぢりに
剱も筒も、うちみだれ、
荒野にのこる、白みし等の、
屍を月は、てらすらむ。』

白びすの舟の、碎かれて、
うち沈みけむ、そのあたり、
波またゝよふ、帆ばしらを
今宵の月は、てらすらむ。』

高麗の荒野に、白みしうつ、
いくさの上を、思ひ出でて、

わが子いかにと、この月を、
親は見るらむ、ふくるまで。』

支那の海べに、白みしうつ、
いくさの上を、思ひ出でて

わがせいかまと、この月を、
妻は見るらむ、ふくるまで。』

今宵の月よ、この月よ
くもらぬ影を、見る人の、
千々の思も、一すぢよ、
わが大君の、上にして。』

今宵の月よ、この月よ、
さやけきかげを、見る人の、
千々の思も、一すぢよ、

大みいくさの、上よして。』

柳城子

○高麗野の露

（一）
高麗のはり原　くもはれて
あられあす玉　たばしりやみつ
かばねの山の　くろかみよおく
露のひかりぞ　ものすごき

（二）
高麗のはり原　秋かみ
むしの鳴音の　かれゆくゆふべ
ひかりも寒き　下葉のつゆは
いくその猛者の　かたみにや
ふみならす
さゆるあかつき
風よみたるゝ　下葉のつゆは

（三）
高麗のはり原　ぬらすにや
駒のいなゝき　あけわたり
風よみたるゝ　かゞやきぬるも
下葉のつゆと
きえしなごりの
やまとますらを
かげかれや

（四）
高麗のはり原　いくそのそでを
朝日のひかり　ぬらすにや
やまとますらを　あけわたり
きえしなごりの　かゞやきぬるも
下葉のつゆと
かげかれや

田村幸子

○平壤懐古

君の爲めよと武夫の。命をすてゝ葛かづら。かへらぬ秋の色深く。折れし刀に霜結び。笛音絶えて風すごし。たれを招くか旗すゝき。名殘吊ふ蟲の。錦の心照らすめり。月影白く紅葉ば

○諸越を征討の御盛擧を稱賛へまつる長歌

青木幸躬

掛まくも、畏きかもよ。天照や、神のいろせの。素佐男の、尊のわざと。浮財、つくる料をし。奇しくも、生しましゝは。廣幡の、神の朝廷に。三の韓、服從にける。

いはれそと、いふは實か』豐國の、神のすさひと。ゆくり無く、討たまひしは。わり無しと、いひしものから。詮なくて、やみしものから。由も無き、わざにはあらじ』一しほの、大御手風よ。神ながら、初國しらす。安見しゝ、吾大君は。西方なる、さかひは有れと、東の、國らやすくと。御意を、明らめたまひ。拷衾、よそはしらきの。疑心、諭したまふと。漢服部、おる機の音の。たかふりを、懲し給ふと。詔命告したまへれ』物部の、八十伴男は。天雲の、向伏かぎり。鹽沫の、留るきはみ。まつろはぬ、國あらせじと。八十船に、物とりよろひ。海原に、湯氣燒つゞけ。卒にも、渡り行ぬれ』天よりや、神のくだりし。地よりや、軍は沸しと。人皆の、まどふあひだよ。飛鳥を、通はすかきり。鐵線の、つて引はへて、隈も無く、事の設して。事しあらば、山崩す彈。仇なさば、岩裂太刀と。折をこそ、した待れけめ』亢ぶれる、國の習よ。惑ひ來し、心の闇よ。武しとは、知れるものから。危しと、思ふものから。さりとものの、頼をかけて。愚よも、事やぶりけり』豐嶋の、沖のしは路よ。淺ましく、或はくだかれ。たはやすく、あるは販られつ。牙山の、支の營

よ。いかめしき、旗打すてゝ。許多の、物かき散し。海山の、こゝよ來しこそ、日本の、はまれとなしつ』然すがよ、やみしも得ねば。たひらぎよ、所を占て。かの江をば、渡らしめじと。この城は、保ちてましと。大かたの、頼みそかけけむ』日の御旗、向ふ限は。螢火の、ひら何爲む。かたの如、守りはあへず。よはかにも、あらけ果ぬれ』打しさて、斯だにあるに。海路よも、ことの起りて。北の洋、あづかる伴の。いくさ船、數のおほかた。其部の、心盡して。その艦の、力つくして。務めたる、效やいづら。海底の、藻屑ししづみ。大ぞらに、烟と消て。發れるも、傷はれけり』斯ながら、うちし進まば。天の稱の、本つみやこも。北と負ふ、今のみかぎも。事なくて、在はつべしや』目よ見えぬ、神みはかりは。顯身の、人こそしらね。古し代よ、よしある國の。無禮きは、咎め給はす。劣をぢれきを、あはれと思ぼす。御謀りの、ことの積りに。東の、くまらの鎮め。他くにの、民等のためと。例無き、大御軍を。こともなく、起したまふは。天つ日の、もらすくま無き。御光りの、國の名よおふ、畏しや、おはみわざとし、仰かさらめや』

おなしく今やうふり

我日のもとの、國がらは。神世の跡に、かくれ無く。天照かみの、御裔こそ。君とましまます、一すぢよ。くに主宰しませ、萬世よ

高麗もろこしに、其外よ。名にたつ國は、多けれと。かみよの所縁を、尋れば。本とするゑとの、別ぞある。きみと司の、しなぞある

くにを廣しと、頼みつゝ。われ尊しと、おごりつゝ。覺めぬまどひの、軍だて。いはほに觸るゝ、とりの子の。ふりし譬へを、目のあたり

艦かたしとて、何か爲す。物としとても、詮は無し。しばしのもとの、打合よ。火筒のけふり、消うせて。のかれし夫さへ、いた手とか

牙の山とて、たより好き。所占たる、いはりして。一日に足らぬ、射くはしゝ。旗ものゝぐを、打すてゝ。敗れし形見を、のこしけり

うみがくぬがの、行ふりに。やぶれしことを、時として。弱さを扶けむ、御意よ。

倨傲をこらさむ、みはかりに。征討の詔命は、くだりけり

軍の伴の、ことゞく。命をさゝげて、競ふなり。國内の民の、おはかたは。たから惜まず、おくるなり。例も聞かぬ、みいつかな

ありなれ河よ、其はかに。防かむ頼みは、あらめども。天の守らす、日の御旗。かゝやくいくさよ、射向はゞ。神の助けぬ、ものとしれ

あめのまもりは、常なしと。ことはり立たる、ためしあり。たがぶる罪の、つもり來て。頼みあらじと、さとりなは。帝のくちねを、たてまつれ

人の得しらぬ、御守りの。神のみわざぞ、頼まるゝ。意の外なる、たつ變動ひに。國のひかりの、あらはれて。きみがみいつの、仰がれて

○吾國の將士の朝鮮よ行くを送る歌幷短歌

田名部彦一

かけまくも、ゆゝしきかも、うまこりの、文よかしこき、八雲立、出雲の須賀に、宮柱、ふとしき立てゝ、天の下、しろしめしける、いちはやひ、須佐の男の神、拷ふすま、新羅のくよは、國柄は、こかね白金、いとさはよ、滿ちたらはせは、皇御

孫の、知らさんくまと、かねてより、定めしおきて和田の原、へたてしあれは、うき寶、つくらんためと、山ゑ野に、千々の木種を、まきちらし、うゑおふしけん、たらし姫、神のみことい、かむかかり、かゝりし時に、うゑおきし、その木をきりて、百船と、つくらせたまひ、墨の江の、神はみふねの、ともにへよ、神つまりまし、向津國、まつろはせれば、年のはに、棹かぢはさず、たてまつる、國のたから、もゝたらず、八十船につみ、つかの木の、いやつきくゝゑ食國を、しろしめすらん、大君に、仕へまつるとかきいなす、かたく誓ひき、下りての、後の御代にも事さやく、高麗のくに邊に、みいくさを、つかはしましてこにきしを、おはしはしらし、世ゑたけき、虎か吼ゆると諸人の、おのゝくばかり、稻妻かひかりわたるともろ人の、かしこむばかり、はげしくも、をたけびたりしいゑしへも、かくのみありて、たけぶてふ、名をしおへれば今の世の、丈夫の子も、かくなはの、かくこそあらめ明らけく、治まる御代ゑ言さへく、もろこし人はとことはゑ、動かぬやまに、はふ虫の、いとみてあれば見もゆるし、きゝも許して、おはろかゑ、思ひてあるを、いくそたび、しけみこちたみ、ねやなくも、さわがしかれば、まつろはぬ、國をことむけ、五月蠅なす、人をやはせと、武士の、八十伴の緒は、かしこかるみことかゝぶり、おは君の、まけのまに〳〵、馬をなめ、船をうかべて、足曳の、やまをふみこゑし、き波の、うな原わたり、刺並の、とおりのくにゑ、朝鳥の、あさ立ちしつゝ、村鳥の、群立ちゆきて、あさ日子の、豐さかのぼる、大御旗、おし立てゆきて、天傳ふ、日の入る國を、言むけゑ、い行われれば、雲ふかき、岩かきやまの、朝露ゑ、うらさびあかし、有磯波、來よる濱邊の、夕霧に、うらぶれくらし、いたかねを、まくらゑまきて、おきつ藻を、夜床ゑしきて、ふる里を、しぬぶ心にさぶしくも、思ひぬらめど、こひしくも、おもひぬらめど、かゝやける、吾日の本の、くゑのうちに、住むてふ人ゑ、日照る空、雨まつがごと、うゑ人の、御食待つがごと、まれぬる、丈夫なれや、玉きはる、人のいのちは、いくばくも、いけらぬものぞ、はつかにも、恥はなうけそ、山ゆかば、草むすかばね、海ゆかば、水つくかばね手力の、つゝかんきはみ、いきの緒の、ありなん限、いさましく、進みすゝみて、平らけく、しづ

め玉ひて青雲の、たなびくかぎり、白雲の、むかふすきはみ、大君の、御稜威のひかり、朝日子の、てりかゞやかせ、然しあらば、家よありつゝ、さぶしけく、思ひし親も、うれしけく、ゑみていたゝん久しけく、待よし民も、たのしけく、ゑみて榮ゑん、呉竹の、たかきいさをも立花の、かをらん名をも、いまの世に、たへすたゝて、萬世よ、いひつき行かん、かくばかり、いさをも名をも、みきひたり、肩よになひて、ふる里に、歸らむ來ませ、其の時の、こゝろはいかよ、其の折の、思はいかよ、うれしからまし、

反歌

むかしより、いひつき來にし、日の本の、
名をなかとしそ、丈夫のとも、

眞木柱、ふときこゝろを、ふりおこし
いさみてすゝめ、とほつ國邊に、

○遠征軍　大嶋經昌

豐嶋沖のとゞろにも　とゞろき渡るつゝ音に
まどろみ破る四百州　ふるひてたちぬ四千萬

旭日かゞやく日章旗　ゆふ月冴ゆる日本刀
風はあびけり鷄林よ　かげは寒けし八道よ

みこと畏こみ勇ましく　劔とりはきつゝよなひ
をたけひ逸る兵士よ　わが日の本の武士よ

三百年の其のかみに　かつて豐臣太閤は
うたでやみよき彼國を　恨殘こしつ地の下よ

弘安四年そのむかし
寇おしけりな我國よ
勝ほこりたるかれ蒙古
をこのしれ者おめき者
今や知るらむ今ぞしれ
我が日の本の國ぶりを
振翳す太刀うつ小筒、
ひゝきぞわたる四百州
其筒よりも太刀よりも
大和男兒の心として
忠なるしるし義の御旗
隈なくてらさむ五大洲
世界は目もる今なれを
國の命もおほ君も
四千餘萬のはらからも
肩よおふなり皆なれか
重きなひに比べては
輕き我身を何かせむ

忠義きたひし日本刀
うけてみよかし鋒先を
あはれ見よみよ成獣や
あるは平壤大孤沖
堪りもあへずして草は
秋の紅葉とちり〳〵に
紅葉をりなす唐よしき
飾りて歸らむ時やいつ
北京の城をふみしたき
四百餘州の朝風に
御旗かゝけむ其日をそ
君まちまさむ國民も
軍たちよし其日より
指折みればはやいく日
ふさると懸と見渡せば
枕べ寒き太刀かげに
月さえ〳〵て霜しろく
はるか喇叭の聲さびし

わがふる里をいづる時
太刀よ縋りて妻子らが
雨ふる丸をくゞりつゝ
潔よくこそたふれきと
生てかへらむ其日には
かざる錦を家つとに
旭に匂ふやまざくら
などかはひかむ一足も
天地とゞろく大づゝの
かぎよ送りて父母は
いひし其こゑいまも猶
進む味方よさきかけて
我に聞せよきかせてよ
賢こき君のみことえて
さらては再び相みじと
大和男兒かすゝみては
烟のうちも火のなかも
煙りよくらき其まより

しら波くゞる水雷艇
つき入まとはあだの船
朝きり暗き森かげよ
きこゆる蹄すはものそ
太刀ぬきつれて騎兵隊
はるかはせ迅敵のうち
虎臥野とやものくし
四百餘州のしこ剛を
きりしたたへむ日本刀
うちしたがへむ村田銃
大和心のたゞ一すぢ
竹わる如きいきほひに
奉天取らむ山ゆかば
天津つかむ海ゆかば
いくさは何ぞ義の爲ぞ
進むはたれぞ敷嶋の
大和男兒ときくからは
おもてに立ものもなし

のぼる旭のはたさゝげ
北京の城にいさましく

足なみとゞろふみ鳴し
國のちかひをとく果せ

その大なるいさをしを
まこと男の兒の鑑ぞと

立しなが名は長しへに
語りつきつゝたゝへ南

我大八洲のうちのみか
わが日の本の國民の

世界の史に傳ふべし
手ぶり示せよ日本刀

白頭山の朝こちに
永くなびけよ日章旗

○懸軍萬里

王師西に向ふて茲に三月、

鐵幹

國民に、何にをか告げし吾々は、
海にては豐嶋に勝ち、
恥しらぬ敵の逃げざま、
君見ずや、王師向ふ所敵やある。

王師十萬、今ぞ渡る大同江。
打て、進め、物の數かは、
懸軍萬里、夕に入らむ山海關。』
御溝の水に波もなき、
名に負ふ邦の光輝ある、
とく立てむ、旭の御旗其御旗。

勝利、勝利、又勝利。
陸にては牙山に勝てり。
見ぐるし快し面白し。
勝利、勝利、又勝利。』
秋たかく馬も肥ゆたり、
平壤の清兵八千と號す、
いざ一戰よ蹴散らして、
清朝の天子夢あたたかく、
北京の城の夜をこめて、
旭の御旗とく立てむ。

○丈夫

柴田顯信

立てや丈夫吾友よ、枕を蹴つて振ひたて、雲よ聳ゆる富士が嶺に、時じく積る白雪の、清き雄心振り起し、むらがるさばい打ちはらひ、君の御ため國の爲、命はもと

よりなきものと俄かにのぼる黒烟、耳を貫くときの聲、あはれ死ぬべき時はきぬ、日頃きたひし我腕の、つゞかむ限りいでやいで、きがみならしつをたけびつ、山は震ひて河も裂け、天地どよます大砲の、轟き渡る修羅の道、黒雲空に漲りて、日かげも爲に光なく、吹き來る風は膚寒し、雨と降り來る炎をも、空にさか卷く烟をも、左にくゞり右にぬけ、電散らし斬りきられ、血しほは飛びて河をなし、屍は積て山をなす、

○我軍の連戰連勝を聞きて○○に在る某將校に贈ら　尾崎壯三

んとて詠みたる歌

掛卷も綾に畏き、現つ神大君の、大詔勅かしこみ奉り、天傳ふ日の入る國の、唐國を征ちきためむと、海行かば水漬く屍、山往かば草むす骸、利心を奮ひ起して、五百重波よする海路に、おろし風すさふ山路に、おのも〳〵競ひ進みて、艦浮べ馬を列らかめ、敷嶋の日本の太刀を、生く太刀と輝かしつゝ、大火砲に小火砲をなへて撃ちとうち轟かしつゝ、進むしくも攻め寄せれば、敵の國廣くしあれど、軍人多

くしあれど、皆からに恐れ怯き。玉の緒の命の限り、打ち返し立ち向ふべき、彌もなみ力もつきて、あまた度敗れてければ、遁るには豈如かめやと、火砲を捨て鋒をもすてて、病み猪の道も選ばて、蜘子なし散りうせけむと、然かはあれと心緩るへす、大詔勅いたゞきもちて、いやさやに競ひ勇まひ、いやさやに奮ひ進みて、海に山にさ迷ひ殘り、まつろはぬ敵のこゝとゝ、征ちきためて伐ちたひらけて、其の敵の國の都の、北京てふ城の眞中に、朝日なす御稜威かゝやく、大御旗高らにたてゝ、現つ神我大君の、大御代を萬代までと、うたひ祝いむ

○わが友渡邊氏が從軍のため國よかへらんとて月の夜よたびたてるを追ひて　維孝

見よ君しばし駒とめて　さやけき空の月を見よ
わが大君のみためにと　すめら御國の御爲にと
太刀とりはきて鞭揚て　いさみたち行く君を今
待てとに有ねど暫し君　駒とめて見よ空の月

思へば十年ゆめのごと
梵字の川に舟うけて
ともにながめき此月を
學びの海のなみあらみ
後はかたみに俳を

ことし三月の春霞
てりまさりけり空の月
ゆくりなく逢ゆくり無
花のあしたに袖つらね
怪しくもこの秋の夜の

やよな咎めそしばし君

過ぎさりけりなその昔
金峯山に節ひきて
共にうたひきこの月に
南に北にへだゝりし
月にくらべて慰さめき

たなびくころは中々に
君が此地に來にしかば
けふまた別何時かまた
月の夕に駒なべん
月を霞のこむるかな

君呼しゆゑこれならず

見渡すかぎり秋すみて
かざす袂に霜とふき
その霜はしも平壤の
持てる刃のうつるかげ
何處にしこの隱るゝと
荒涙くだけてなれる玉
わが大君が國のため
いますかりはの苦の影
思へば袖ぞまづぬるゝ

二千五百歳やしなひし
いざしめしてむ北京城
屍をかへてさらしおん

あなさやけしや空の月
駒のひづめに玉とちる
夜をいましむと武士の
その玉はしも渤海の
尋ぬるみ船の蹴て進む
駒とめて見よしばし君
民の爲にといそしみて
月に見ゆ也かしこくも
思ばにくしこえみし

日本男子のをゝしさを
御旗をそこに立ずば
さむけくさゆる月影に

行けさらば君別れなん　別れて後はたまぢはふ
神のかはせん所ろにて　共にながめんこの月を
きみ歸り來ば此地にて　我たちゆかば彼地にて
行けよ行け君鞭あげて　進め駒とくいかゝきて
さやけき空の月影に　君をば遠く送らせむ
我もかへらん送られて

○默水山莊主人の渡韓を送りて　鐵幹

音無川音こそ立てぬありあれの
涙につづける水なるを。
このたびの風のさわぎをよそにして
なにいたづらに流るべき。』
筆とるもつるぎかざすも益荒夫の
行くべき道ゝひと筋ぞ。』

吟壇の猛者、今ぞ立つ
たぐひなきこの御軍にたぐひおき
君がうたにぞ入るべかりける。

○老將軍　羽生芳太郎

三尺の劔拔きもてば、垂氷の光身も寒し、神に請のみ山刺せば、たばしる泉涌いで
ぬ、梓の眞弓我ひけば、胸に掛れり三日の月、雲のあなたに鳴鏑、鳴の響に雁おきぬ、
君の御爲と國の爲、家路さかりて幾年か、仇もる砦に旅寐して、かゝるも憂や老の
波、寄る年なみに緋威の、赤き心はかはらねど、今はた白し取よそふ、鎧の袖に霜
おきて、
あはれと見るやこれの駒、しづ鞍おきて我を乘せて、千里ゆきかひ諸共に、軍の庭
に老にたり、しかわれども歩め駒、今ぞ歸らむ故郷へ、水かひたりし古の清き野
川はあれやせし、

○老壯士

君は師團の長として
　み國を守る大將軍。
我は四國の山里に
　餘命をおくる老壯士。
師團の長と老壯士
　位置こそ違へ君とわれ。
國に盡さむ眞ごゝろは
　いかで劣らむ將軍に。
奥羽征討のそのかみを
　思へば夢の夢なれや。
われ官軍を導きて
　會津、白河、棚倉と。

ていにかしこに轉戰し
　死地に入りしも幾そたび。
馬齡徒らにながらへて
　ことしはわれも五十三。
鬢髮霜を加ふれども
　勇氣はいまだ衰へず。
むかし覺えし太刀筋を
　忘れ果てぬもたのもしや。
もろこしの、野邊にさまよふ夢さめて
　枕刀をとりかざし。
夜半の叫びに幾度か
　家人の眠を破りけむ。
此頃聞けば將軍も

彼地に渡りたまはむと。

昔の好みを忘れずば
われをも具して行たまへ。

あたら命を山里の
落葉が中にむざ〳〵と
埋めはてむも惜くして
今日おとづれつ君が宿。

將軍願を入れたまひ
具して行かむとのたまはば
死して榮あり老壯士。
長白の山、鴨綠の水。
この老骨を曝すべき
處はいづこと擇ばむや。

いかに將軍
國に常備の軍あれば
具して行かむもすべなしと
そのことわりはわれも知る。
むかしはむかし今は今
大刀三尺横たへて
駒に跨り陣頭に
立あらはれていさましき
手柄あげつゝ誇らむの
功名心は露もなし。
只一片、國を愛する眞心を
君に捧げむねがひのみ。
やむことなくば兵站の

軍夫となりてもまねるべし。

たびの軍に從はば
死して榮あり老壯士。
いざといはゞ忽つるぎを腰にして
草の庵を蹴て起たむ。

長白の山、鴨綠の水
われらが爲には好墓田。

落葉生

○從軍畫伯

一枝の筆を杖にして
病ある身もかへり見ず
大御軍にしたがひて
奮然踏み入る高麗の山。
砲煙彈雨のその中に

うつしし其繪數しらず
ことにめでたき船橋の
里のいくさの繪卷物、
かしこきあたりに傳はりて
從軍畫伯のその名さへ
たぐひまれなる平壤の
勝利と共に知られけり。

成歡の山平壤の野
ししく見つるみいくさの
そのありさまを語らむと
一たびかへりし病畫伯、
かしこきあたりよ召されつゝ
かしこき仰かうむりて

けふはたふるふその筆に
いかなる樣かうつすらむ。

嘯く虎は風を呼び
高麗の荒野もふるふべし

翼をはたくはし鷹い
天つ雲をも起すべし

かしこきみことかうむりし
畫伯の榮い金鶏章

賜いるよりもうれしくて
病もいつか忘るらむ。

行け〳〵畫伯また行て
四百餘州を踏破る

大御いくさのそのさまを

うつしてまたも奉つれ。

○天機伺ひまつらむと廣島みむかひし時

東角井福臣

海ゆかば水つくかばね、山ゆかば草むす屍、おほきみの邊にこそ死なめ、のとにい
しなしと言立てゝ、燒鏃の利心おこし、鳥が鳴くあつまをいてゝ、東の道の海つち、
はら〳〵に獨しゆけば、富士か嶺い送るが如く、大井川むかふる如く、大ふねの思
ひ頼みて、劍太刀尾張の國、たくふすま名古屋の里に、打むれて出るをし見れば、
皇軍に射向ふやつこ、はらからをあやめしなみし、うつ砲は肩に負ねと、切太刀は
腰に佩ねと、たゝむきのい續く限り、むかもゝの動かむきいみ、打たゝきくひはら
ゝかし、一向に仇を報いむ、一筋に恥をや見せむ、しかれとも我大王の、命もちこ
ゝにとゝめて、菅の根のねもころ〳〵に、說さとし敎へ給へば、夕にい嚢とり持、
朝には鎌とり添へて、仕ふると聞てしあれば、せんすへのたつきそなしに、かしこ
きや熱田の宮の、神なひに君が八千代を祈りけるかな

大王い神にしあれば百國も
よりて仕へてかきりしられて

○清國を征する我軍人の勝利を祈る歌一首並短歌

佐藤恭順

言さへく清國王、日本の倭に對ひ、結びてし條約に戻り、交際し信義に違ひ、軍艦韓海に浮けて、吾國の軍艦に、無禮も大砲放ち、如何あれば斯や有けん、韓國を奪ふ術か、吾國をはかる心か、無道穢き所業ぞ、然れてそ吾天皇は、天の下八洲の國に、交戰を宣らし給ひぬ、其故にいとも畏き、大詔戴き奉り、韓國の遠き境に、艦乘しまかりましけん、皇軍の將校等、劔太刀腰に取帶び、荒駒に鞭ふり立て、軍事とり總給ひ、千萬のますら武雄に、小銃持大砲引かせ、吹風にみ旗靡かし、ふく笛に列を整へ、木の根ふみ磐根もさくみ、暴き風荒浪さけす、海原は沖に渚に、陸兵山野野邊に、時となく煙り吹立、打放つ小銃大砲、音繁く響き渡らひ、天地も轟く迄に、打防ぎ挑み戰ひ、眞鐵卷造れる艦も、岩垣の八重なす楯も打砕き砕ちりにし、

百萬敵は寄するも、斬屠り攘ひ打退け、遠けく北京攻とり、清國の國王、擒にし國中ことく、掃き清め服從しめて、日本の國三稜威を、さしのぼる朝日の如く、宇内に光り渡らし、事終りかへらん時は、大海に艦の舳續け、皇軍の旭日章のみ旗、雲井吹順風に靡け、軍歌高くうたはし、すすみゆくかへりきまして、かへりこと奏し奉り、ことほかひ奉らんことを、皇祖皇大神に、天つみ神地つみ神、八百萬千萬神に、朝なく神酒みけ供ひ、幣捧げ祈り奉らん、畏けれとも、

反歌

大詔いたゞき持てる軍人
幸くまもりたまへ天地の神
清國をはや言向けて軍人
歸る待なんみ酒かもしつゝ

○征清事件につきてよめる長歌並短歌

大野寛蔭

やすみしゝ、我が大君の、しろしめす、すめらみ國の、たけをらが、こゝろつくしの、程見えて、海にくぬがに、日のみはた、かゞやきたてゝ、ことさへく、唐のたふれを打ちきため、打拂はんと、虎のふす、野邊もいとわず、獅子の住む、山もいとはず、一向に、進み〳〵て、末遂に、日本魂、異國に、かゞやかすらん、ますらをのとも、

反歌

すめ國のますらたけをの眞心を
世にあらはさん時わきにげり

○皇國の旗

中村秋香

百千のいかづち、空に轟き。うづまく烟は、海を覆ふ。龍は雲に躍りて、稻妻ほどはしり。虎は風に吠ゑて、激涙さかまく。天柱みる〳〵碎け、地軸たちまち拆け。

濟遠逃れ、廣乙敗れ、高陞沈みて、操江わ降る。あな心地よや、勇ましや。皇國の旗の、日の光。先こそ耀け、豐島の海。」大砲小銃、鬨の聲。峯を動かし、谷を搖り。屍を積みて、山をなし。血はたゝよひて、川を漲らす。一壘落ち、二壘破れ。三四五六、みな支へず。風聲鶴唳、逃げ散る敵。飛鴉流電、追ひ擊つ味方。あゝこゝちよや、勇ましや。皇國の旗の、日のひかり。またも耀く、成歡の山。」涙しづかなる。瑞穗の國。あきつしま山、うらうらと。今こそ昇れ、朝日影、空にわ翔る、八咫烏。錦の御旗や、導くらん。海にはをどる、大小魚。大御船をか、負ひまつる。東洋半球、あまぎる雲霧。黃海萬里、しまける涙風。これより晴れて。けふより和ぎて。四百餘州、風おだやかに。野末山おく、おしなべて。靡くや旗の、日の光。耀くけしきを、明日こそは見め。

○三國の關係、東方の安危

逸見仲三郎

我彼の國の隔てと、白涙わ湛へめぐれど、島山をかたみに向へ、磯崎をたかひに列ね、いと近く隣れるからに、親子如す親しみ睦び、兄弟の交りなして、韓國を獨立

てむと、公使を支那に遣し、いにし年條約ませれば、是をしも基としつゝ、やゝ〳〵に情誼協せ、大船の寛に穏に、文華咲き榮えしめ、遠洋に匂はせてむと、御心を盡し給へり、此の條約永く久しく、三の國正幸くあらば、島山に嵐起らず、磯崎に荒波立たで、東洋國らこと〳〵安からましを。

○民力の鐵壁、國勢の干城

逸見仲三郎

尸をし荒野に晒し、血鹽をし海に注ぎて、戰へる軍の部のいたづきを慰めてむと、臣民の國に報いむ、眞心の分を盡して、海陸両省下に、各自黄金白金、持ち捧げ山なす思へべ、皆人の其の親しみい、家内の親子兄弟、睦びあふ狀に替らず、我が國はやがて吾が家、水に入り火に入りぬとも、わが家をいかで捨てむと、競ひつゝ勵みあいて、献る人の誠の、いや高く積るふりけり、あはれこの人の誠は、劔太刀砲も及ばぬ國の御楯ぞ、あはれ其の民の力は、弓も矢も鉾も及ばぬ國の守りぞ

○清國の瓦解近つきぬと聞て瓦よ寄せてよめる長歌

小林正和

並短歌

燒太刀の、とこゝろあらぬ、言さへく、唐のたふれら、海ゆけば、底にしづみぬ、山ゆけば、ふみ碎かれぬ、然れこそ、是のたふれら、譬れば、瓦か土か、かゝれこそ、碎かれ果て、ちから盡、ふたゝびとたに、起立ぬ、國となりつれ、瓦なす、是の醜國、月日經なくに、

からくには何にたとへむさながらに
ふめばくだくる土瓦かも

○靈鷹をよめる歌

湯谷基守

むら鳥を蹴ふとす鷹むら鳥をいつかむ鷹はし鷹のしるしかもへば此鷹の進むかことく此鷹の猛さがごとく官軍の進みたけひてから國の醜のたふれをことことに蹴はらゝかしことゝにいとりつかみて其國をまつろへぬへきためしなるらむ

○清國の兵士捕虜となりてひかれゆくかたよ　梅園寅清

足引の山鳥の尾の、長ゝに頭ゆたれし、唐人の髪とりつかね、ひとつらにひこつらひ行、そのさまは、はな繩はへし、牛にかも似る、

○赤十字の歌

菟道春千代

第一章　赤十字の博愛

赤心を、そめてゞ色に、あらはする、慈惠もふかき、此章旗を、進み行く手になびかせて、仇をもひろく、いつくしめ。

合唱　幸なき者を救ふなる、仁惠あまねき赤十字

第二章　傷痍者の救護

國のため、つくす心の、かゝらめや、傷痍になやむ、兵士は、彼と我との、へだてなく、助け起して、いつくしめ。

合唱　幸なき者を救ふなる、慈惠あまねき赤十字

第三章　疾病者の救護

大丈夫の、身をも侵すは、疾病なり、患ひなやむ、兵士は、かれと我との、へだてなく、藥滋あたへて、いつくしめ。

合唱　幸なき者を救ふなる、仁惠あまねき赤十字

第四章　醫務員の施仁

たゝかひの、場こそわきて、醫師等が、仁術はとこす、時ならめ、彈丸を拔き取り、傷疾を縫ひ血汐ぬぐひて、いつくしめ。

合唱　幸なき者を救ふなる、慈惠あまねき赤十字

第五章　看護婦の施德

たをやめの、かよわき足も、風すさぶ、いくさの場に、ふみいれて、疾病の床にかしづきつ、枕邊さらず、看護せよ

合唱　幸なき者を救ふなる、慈惠あまねき赤十字

○歌へや歌人　落葉

うたへや歌人、うたへかし、
たぐひまれなる、みいくさを。
うたへや歌人、うたへかし、
君の爲また、國のため。』
筆とるも、はた太刀とるも、
大君に、つかふる道に、一つなり。
太刀とるも、はた筆とるも、
國の爲、つくすつとめは、一つなり。』
うたへや歌人、とる筆の、
その命毛の、あるかぎり、
うたひ〳〵て、屍を、
歌の廣野に、さらせかし。』

敷島の、ますら武夫い、
かねてより、大君に、命はさゝぐ、
山ゆかば、草むす屍、
海ゆかば、水つく屍と、かねてより。』
うたへや歌人、なれも亦、
同じ御國の、ますら男よ、
月雪花の、あはれのみ、
うたふが汝の、つとめかは。』
筆とりて、うたひはげませ、
君の爲、軍に向ふ、つはものを。
筆とりて、うたひ慰めよ、
國の爲、子等出しやりし、其親を、
夫をやりにし、其妻を。』

東學黨　鶴光美

稲妻の光りをり〳〵あらはれて雲間もすこき夕立のそら

日本軍艦仁川港にいたる　同

汐さわぐ港の月にものゝふが舟よふ聲のいさましき哉

危機一髪　同

雨ふらむそらに近くもなるかみのいつはた中におちんとすらむ

清兵牙山を發す　同

中〳〵にうごくけしきも見ねざりし大木のこずゑ風吹わたる

朝鮮事件　本多晋

虎吼る高麗のあら野に益荒男は太刀の緒とかで夜や守るらむ

時ならぬ秋の霜をや照すらんありなれ河の夏の夜の月

國民　桑山貞常

いさといはゝみな矛とりて立あがる日本男子の心しらずや

神祠有聲　伊豆の舎

神もさぞ荒びますらん靖國の御社すごき物の音する

韓警　糊澤敬之助

こまなべて進め武夫すめ國の御旗仰がぬ人はあらしな

日の御旗胡砂吹く風にひるがへし月に嘯く大和ますら雄

日の御はた遠く輝く大空になびきてうせん方もあらしな

愛國友　福井信敏

國の爲めみ楯とあらん心をばゆめな忘れぞ丈夫の友

偶感　久保木健雄

いさましく登る旭の旗風にあびかぬ國はあらじとぞ思ふ

日の本にあだなす國のあるぞてふいざやすゝみて打平らげん

亡き父のかたみのつるぎ今や世にいづべき時となりにけるかな

二十三日朝鮮京城の變を聞きて　米澤與十郎

敷島の大和かぬちが太刀風は吹きそむるよりいさましきかな
百濟野のあらしにつれてまさるらん御國の爲めに盡す思ひは

偶作　鐵幹

こゝろ躍る夜半にもある哉月さゆて我とる太刀に雲立ちのぼる

清廷虛威　日本生

雨よばんけしきたもなしあはれ〳〵姿ばかりの龍の身にして

失題　巴戟

想ふことみち足らはしてから國もひとつに照す月や待たまし

仝　斯花の舍

氷あす太刀とり佩きて見さくれば夏の夜なから月さむくして

日兵入京　岩田操

天つ日の御旗さゝげて太刀はきて韓のみやこをねるは誰子ぞ

豐島海戰我軍勝利　霍美光

吹あれし沖の汐風しづまりて朝日のぼりぬ海原の上
空ちかくおほひてきつる黑雲を吹はらひたる風のすゞしき

題しらず　橋爪眞民

皇國の太刀の光りぞこま人ももろこし人もまばゆかるらん
もとの如く流してそ見んさかさまに波立ちかへるありあれの河

仝　よみ人知らず

日の本の人の心はみよしのゝよしのゝ櫻ふしの白雪

報國　西陸漁夫

二つなき身をも誰れかは惜むべき國に報ゆるますら猛男ゝ

開戰報至　湖處子

支那ふねを打しつめたる筒おとにこゝろうこかぬ人なかるらむ

進軍　同

日のまるの旗ひるかへせみくに人阿爾泰山の高峯おろしに

牙山灣大捷

海はらのしはらくゝもる雲間よりあらはれそむる日の丸の旗　同

牙山大捷

はら〳〵と風にみたるゝ秋の野の露よりもろしもろきしな人　同

毎戰清兵先發

よわきをば見せしといとむこゝろにそよゐきこゝろはあらはれにける　同

日兵勇

大そらをつらぬく彈丸の一聲にとひくるものはあらしとそ思ふ　同

從軍行

わかくさの妻子すてつと人はいふ身をすてゝゆくますら武夫を　同

送征夫

わかせこか舟出おくりておきつ波かへす〳〵ものをこそおもへ　同

征戍

なすともなくて起ふし暮す日のたゝかふよりもくるしかるらむ

こほりともさゆる劔を月かけにかさして人のすゝみするらむ

弟の從軍すときゝて　杉原多喜

打いたす筒の烟ときゆるともますらたけをの名をしけがすゑ

召集の命を待つ　伊藤米藏

くにの爲めなにかおしまんしかばねを高麗の荒野によしさらすとも

偶感　久保木健雄

太刀つるぎ枕となして寢ぬる夜の夢もむなしく結ばざりけり

日本のますら猛夫かたましひを世にかゞやかす時はこの時

夜間演習　赤坂兵士

銃擔ふ手にかゝりけり夏の夜の月をやどしゝ松の下露

露營　同

おしよする敵かとばかりまどふまで假寢しをればやぶ蚊なくなり

朝鮮の空をながめて　同

ことさへく百濟の海は廣くとも夢に渡らぬ夜半いあらじな

雜感　橋本嘯月

日の本のみ旗かざして唐國の四百餘州をおびかせよきみ

仝上　不二山人

いつくまで照渡るらん久かたの我日の本の國のひかりば

豐島海戰　淡々舍主人

から人のくされし魂をこまの海に洗いんとてやふねこぎつゝ

仝上　致堂

一聲の矢玉に沈むから人の術今更にもろくもあるかな

牙山陸戰　同

虎吼る高麗の荒野に馬たてゝいさみし聲に散る木の葉かな

折りにふれて　よみ人知ず

戈をとりていざや眺めむ西のかたもろこしかけてすめる月をば

牙山の忠死者を思出して　草のや緣

よもすがら今宵の月はくだら野の草間の骨を照すとすらん

成歡野戰　よみ人知らず

かねてよりまつらんものと誓てし命のいかてをしからめやも

雜感　竹中生

虎の伏す高麗もろこしの野末まで吹きなびかせよ日の丸の旗

召集令を待つ　莽丹居士

赤心をこめにし劍ぬきもちてしこのして草薙ぎ拂ひあん

大君の御旗のなびく高まの野に手に立つ草はあらじとぞ思ふ

所感　虎嘯堂主人

二つなき身をも忘れて勇み行く大和猛夫の心ゆかしも

喇叭卒の戰死をいたみて　棚橋敬之助

梓弓やはか引くべき握りてし笛のしらべのよし絶ゆるとも

本多晋

仝

玉きはる命のきはみ軍笛のしらべみださぬますら男あはれ

千瀾萬濤樓主人

偶作

ゐみしらを斬りにし夢はさめにけりまくら刀や聲たてつらむ

仝

月に對して西海の友を思ふ

さやかなることよひの月を和田の原いづこの灘に君は見るらむ

讀人知らず

軍中作

駒とめて水かひをればありなれの川上あかく月出でにけり

金子雄太郎

失題

この夜頃太刀を枕にまどろめは仇うち得たる夢のみにして

兵士某

示友

皇軍の恥と知らずやいたづらにとる太刀ならばさもあらばあれ

從軍出願者中に加わりて

この髪を染めても往かん老が身の殘りすくなき世の思ひ出に

老人

豐嶋附近の海戰を聞きて

わがいくさ勝ちぬと云へり豚きりていでひと盃の酒は飲みてむ

兵士某

送征人

さかはぎに皮さかはぎて歸れ君もろこしの山のむくつけき虎

石森和男

失題

耳塚のありてふことをまつろはぬからのゐみしに聞かせてしかも

落合直文

日兵勝利

いにしへの益荒猛夫のいさをしをまのあたり見る時は來に鳧

雪臺

泡章旗

ものゝふがかざす朝日の旗風に靡かぬ國はあらじとぞ思ふ

久保木健雄

操江號

倉田保之

打むかふ力も折れて白旗のしらゞしくも捕れにけり　岩田操

軍旗

打なびく大和錦の旗の手に見ゆるいすゞの伊勢の神風　仝

秋風

太刀の音銃のひびきにまじりけりからの荒野の秋の初かせ　竹の里人

三韓舟中の作に擬す

雲かあらす烟かあらす日の本の山あらはれぬ帆檣の上に　岡村御蔭

豐太閤

いさこきし駒の口とれ唐土の芳野の山の櫻かりせむ　同

藤肥州

いさや子ら虎ふす野べにうまいしてわか日の本の富士の夢見む　讀人知らず

所感

矛とりていさ立ちあがれ御國人醜の醜草なきはらひてむ　眞洞居主人

偶成

敷島の大和かぬちか燒太刀のかとうちはなつ時は來にけり　大屋丙子

折にふれて

ものゝふのつるぎの霜に秋ならぬこまのはり原紅葉そむらむ　高崎茂秀

太刀

さしふつのみたまたまへる太刀はきて唐のこきしの軍とりてむ　日本撫子

名刀

神さふる太刀にそありけるかさしをれば毛もいよたちて光り身にしむ　諏訪忠元

夢

から國のあたをうちしと思ひしはさめてかひなき夢にさりける　小中村義象

武生に至れるとき宣戰の大詔を拜讀して

青雲の壁立つきはみ日の御旗かしおびかさん時は來にけり　水嶋菜花

偶成

はひこれるしこの醜草をれふしてこまの荒野にくつわむしなく

成歡の戰にて我陸軍の勝たるをことほきて　大野泉

日の旗のみいつの風にあひきふすもろこし人や見るかけもあき

畏くも我　今上陛下御出陣あらせられし日戰地より

大勝利ありとの報に接して　赤心一徹樓主人

天皇の日の大御旗打たてゝすゝみ行くてにかちとき聞こゆ

大勝利　泣男

打ち拂ひ打ち沈めつゝ陸に海にかゝやきわたる御代の旗風

甲午仲秋艮夜所感　澤田重頴

いてましの大御かりやにこの秋い今宵の月をみそなはすらん

虎かふすからの荒野に戈立て月に軍の歌うたふらん

益荒男かわかのる駒に水かひて月夜をよしとうちいさむらん

駒あめてわかますらをは打きはひからの都の月やみるらん

鰐躍る大海原の軍艦はつゝならへて月やみるらん

あまりにもすめはすむ夜の月もうし思へばおもふこの絶ねば

照月にぬきてかさして打なかめたゝいたつらに持ん太刀かは

民心　泣男

おくれじと急くそ民のこゝろなる大みくるまの御あとしたひて

斥候　水野菜花

矢玉ふるもろこし原に駒立てゝあたやいかにと小手かさしつゝ

題しらす　よみ人しらす

あきふせて高麗野の秋の月を見ん行くてに立てるから黍の草

まちにまちたる充員令にあひて　小山琴八郎

まちわびてながむる空に聲高くなのるもうれし山ほとゝぎす

今日よりそかはりそむらんさくら花のとけき春にあへぬとおもへば

朝鮮國へ軍たちする人におくりける　藤井行磨

すめらわが君のみいつを外つ國にかゝやかすべき時は來に鳧

失題　阪正臣

吹く風ゝ身にしまねともからころもうつへき秋ゝ近つきにけり

朝鮮の擾亂を聞きて　相嶋美隆

韓山に風こそさわけこのゆふべ虎の伏處も荒れむとすらむ

從軍行　木村三太

敵ははやふちてゆくらしから山のこふかきわたり駒の嘶く

述懷　休職陸軍大尉　山代清三

磨くべき時ゝ今なり君がためかねてをさめし大和だましひ

時しりて散る花もあり人もまた花とちりつゝ世にかをらまし

軍中の月といふ題にて　賀茂水穂

あたうちし煙もはれてさやかなる月や見るらんもろこしか原

失題　同

陸に海にたゝかふ毎に勝軍昨日もけうも聞くそ嬉しき

軍中の月　同

さやかなるこよひの月ももろこしはくもりやすらむ火矢の煙に

朝鮮の捷報をきゝし日盃を擧げてよめる　福羽美靜

からくにの虎ふす野べに天皇のひかりをはなつけふのめでたさ

清國と宣戰の詔をよみて　同

國の爲しかよと君かのらしまする大御心のたかくもあるかな

萬民の心になり代りて　同

敎へある國の民ぞといはるべき行ひ見するときゝ來にけり

ゆく人もとゝまる人も國のためともに力をいさつくしてん

滿清王か出したる宣戰の書を見て　同

いふ事はいかに巧につくれともをちけし影は隱しこそねぬ

滿清王が將來を思ひ遣て　同

みし夢のねふりもさめて跪きいづこの人の蔭たのむらむ
我軍大に勝ちぬと聞て　小林正和

今よりや虎ふす野邊もふみわけてしこのしこ卿かりつくすらん
濟遠廣乙の二艦逃走せしを　同

あみの目にかゝりし魚も一度いもれ出てこそにげはしりけれ
明治十四年九月朝鮮京城に内亂ありしとき　大庭永成

武士の屍は野邊に曝らすとも清きその名ぞ世々に殘らむ
明治十五年七月朝鮮京城變亂のとき重圍の中にて部下に誓ふ　同

拔きつれてうてや劔の折るゝまで露の命のすて所なり
明治十七年二月朝鮮京城にてあだの圍みをやぶりしとき我公使館の門壁にしるして諸人をはげまさんとて　同

よしさらば我秋風の一振に散らして見せむ木の葉韓人
思遠征　水原未瑳子

異國の虎ふす野邊も蹈したき進めや進め大和ますらを
同　酒井恭子

日の御旗海に陸路に輝きてもろこし人もまはゆかるらむ
同　加藤安彦

限りなき青海原を軍ぶねいのちも輕く載せてゆくらん
同　梅村宜雄

明ぬればけふいいかにと外國の軍の便いはぬ日はなし
同　南摩牧子

旭日影のぼるほまれを海の外に輝かすべき御軍ぞこれ
同　加茂貞次郎

國にあらば裏安き世を軍人馴ぬ山路やゆきあかすらん

同　安東菊子

勝ときの聲諸共に皇國のますら武夫の名もひゞくらむ

同　恭子

楯なめし銃を枕につわ者は幾夜わひしき夢むすぶらん

軍中の月　甲秀輔

うつ筒の煙の末に月すみて杜かけちかく駒のいなゝく

此所の峯かしこの岡に旗見えて月にいなゝく駒の聲々

関族處刑　北田梅仙

さやきつゝ茂る醜草かりそけて雛の林に根をな留めそ

支那まけ日本は勝といふことを冠におきて　小林正和

しなはみなまほに風うけにげてなほむかはぬ舟はからくのがれつ

野津中將の君を　かつら子

聲立る虫てふ虫をいさからむよしや虎ふす野邊と聞共

月の夜戰地にある人々を思ひやりて　同

から山を踏み轟かす大丈夫も月に皇國の空やこふらむ

大鳥公使　會田安昌

大鳥の羽風にあひてくゝたかけの棲める林は動きけるかな

同　三橋中雄

くゝたかけの群に入りても天翔る鶴の翼は撓まざりけり

我皇軍の捷報をきゝて　前田夏繁

吹はらふ我山風の烈しさにからなてしこの色も殘らず

成歡牙山の勝利の如くなほゆくさきの戰ひに

皇軍の向ふところ風靡せざる所なから

むと人と物かたりたるときよめる　同

猛雄らのいふきに折れぬ草をふみゆくて安けき唐か原

宣戰の大詔ありける時我室闌護港私園の人

々と鳳凰山にものして　三橋中雄

諸共に勝鬨あげむいさ今日いからとり山を踏鳴しつゝ

皇軍の雄々しき事をたゝへて　北田梅仙

世の亂れ打鎭めんの筒先にもろこし舟も浮ひかねけむ

同　小林正知

益荒雄にかり立られて虎すらも千里の遠に逃迷ふらむ

同　會田安昌

さやくらん草のかき葉の跡もなく刈拂はまし唐土か原

虎も出は打取なましから人を安く屠れるまするをの友

大御ことにより大鳥ぬしの朝鮮にとゝまりける時　三橋中雄

天翔る鶴の羽風に庭鳥のはやしはいかに涼しかるらむ

宣戰の大詔ありける時　同

古への跡を尋ねて武夫のありなれ河に水やかふらむ　甲秀輔

陸軍大臣

幾年も咲きては落ちしあた花のみを結び得し君そ賢き　同

大鳥公使

蔓りし高麗のしこ草根を絶ちて移し植ゑたる園の白菊　會田安昌

豐島沖戰の時の濟遠號を

仇波はうちも向はて大船の底はかとなく惑ひにけむ　同

支那敗兵

尾を捲て逃し豚の果〳〵は飢死おいてやさまよひぬ覽　賀茂水穗

大元帥陛下御親征御發輦を拜み奉りて

いてましの稜威かしこし朝風に錦の御旗にしに向ひて　三浦千春

八月十五夜神戸の行在所を思ひやり奉りて

天皇のみいつかゝやく大空に月も今宵や光りそふらむ

大嶋旅團長を

大島の岩根にもろく碎かれてよる仇波や立さゞらむ　北田梅仙

或朝豐嶋沖海戰の圖を見て

寫し繪の上を照せる朝日さへかちし軍の光りなるらむ　小林正和

清艦灣外に出てすと聞て

こゝ兼て波にたゆたひ日を暮す漢い今こそ末のまつ山　同

日清戰爭両軍の勝利打つゞきたるをことぼき

侍りて

天つ日のみはたすゝむるみいくさにふしまつろはぬ仇ならめやは　寺倉茂右衛門

喇叭卒白神源二郎氏

うたれても猶止まらぬ笛の音に眞心赤き血さへ吹けむ　水原みさ子

海軍

から船をこゝら沈めて日の本の本れは高き船いくさかな　同

陸軍

日の本の神風遠く吹もれてたつ草もなしもろこしが原　賀茂水穗

平壤の戰を思ひやりて

眞萩原露のしら玉朝風にうち亂れけん高麗のあれ野は　塚原等

折にけれて

鴨綠の河に水かふ時來ぬといさみたちけり甲斐の黑駒　同

鉾とりて眺めやすらむ武士も高麗の荒野の秋の夜の月

高麗山に掛し砦の捨がまりあらはに見せてすめる月かな　岩田操

朝鮮改革

今よりはこまの荒野のなでしこもやまとの色の花やさくらむ　同

月の夜遠征の友を思ひて

いくさなる友はいかにと見る月を友も見るらむ知らぬ荒野に　同

軍中月

死も生も君のまに〳〵行くみちをさやかに照す月のかげかな

秋夜　杉村津涯

もろこしの都にまでもゆくものは秋の長夜の夢路なりけり

臨別作　鷹峯居士

忍び音に泣く妻よりもをさな子の別るとしらで笑むぞ悲しき

旅中作　與謝野寛

風さむし駒のたつ髪日は落ちて夕霜見ゆる那須のしの原

擬従軍作　同

千軍万馬よせしは夢か月さえて萩の葉そよぎ秋の風吹く

送恩師落合直文君之召集入營　在豫備軍籍　鐵幹

ふみの上の師とこそたのめ軍さへさきがけますと思はざりしを

筆とらばその筆もちて太刀とらばその太刀もちていざ仕へませ

従軍すべき日近きぬ、友に送る書信のはしに

また見むとおもはゞ櫻さく頃に訪へや九段の神のやしろを

失題　在兵營　今泉横村

からねみし憎し向へと聲立てゝ人おどろかすこのしろの夢

閨怨四首　同

かかる折り昔の人も夜もすがら衣うちつつもり明しけむ

威海衛つきし軍艦に君ありときしい月の初めありけむ

二人してめでつと見しは夢なれや閨の戸しろきありあけの月

わが夫の衣ならずはいかにして夜さむの秋の月に打つべき

送人　山田やすら

日の本の名をし思はゞ血ぬらさぬ太刀とりはきて歸るなよ君

皇軍平壤畧取の大快報を得て　前海軍主計總監　長谷川貞雄

淵も瀬も敵の屍に埋たてゝ大同江をかち渡りけむ

時ハ仲秋望月の頃にあり　同

ものゝふのかざす劔に影さゑて月に聲あり平壤のあたり

送征兵　甲秀輔

往けやゆけ進めや進め國のため身は唐國のつちとなるとも

海軍の大捷報を聞て　長谷川貞雄

黄海にさかまく涙を破りつゝみいくさ艦はいまぞすゝめる

渤海に潛める黄龍をとらへ來て君に捧げん時は近つきぬ

天つ日の御旗輝くいくさふね向ふ海には起つ波もなし

喇叭手某の忠烈の死を　小林正和

息の緒と共に絶えても笛の音の四方にぞ響く君がいさをし

北進軍隊　同

北にのみ心すゝみて此秋ハ夜さむもしらしますらをのとも

平壤の戰爭我軍大に勝ぬと聞て　同

いと早もありなれ川の濁水せき落されてつき果てにけり

某新聞社特派員として敵地に行かるゝ人に　同

おくるとて

打しきるさまをみむとや唐衣はるけき旅に思ひ立らむ　弘田親厚

折にふれて

世にあらは軍衣を片しきて虎ふす野にもいねまし物を

黄海にて清艦を擊しつめし捷報をよみてよめる　小島行猷

すへて皆うちなしつめそからふねもつひにみつきのうき寶かり

平壤陷落の新聞號外をよみて　菊池眞澄

かくそとはかねておもへといまさらにとひ立はかりうれしかりけり

豫備後備軍の召集ありけるとき　千家尊福

君かため心つくして沖つ波たち後れぬる人はあらしな　杉田政次

喇叭卒

笛の音は國の内外にひゞきけり身はあだし野の露と消ゑても　金子雄太郎

擬軍中作

矢叫のこゑとききしは夢なれや月よりおろす山おろしの風

たきすてし籌のけぶりかつ消ゑて雪よりしろしけさの初霜　細田榮德

偶作

むかふところ斬りておびけて天つ日の御旗かかげむからのみやこに　米澤與十郎

平壤敗兵

十六夜の月はあれどものがるべき道にまどへるえみしらあわれ　徒然坊

折にふれて

駒とめて誰かはめづる秋かぜに紅葉散りしく高麗のはり原　戸田則素

月の夜こたびのいくさを思ひて

あし原にひかりあまりてから國のやみをもてらす秋の夜の月　佐々木霜湖

偶作

かねてより御國のためときたへてし日本刀をいざためし見む　一葉生

擬軍中作

野を行けは朝露きよしすたれたるあだのとりでに月ぞ殘る　與謝野寛

軍中月

益荒夫の行くべき道にまどはねばこころのこらぬ有あけの月　巨口赤目子

かちどき　（五首）

うてばくだき攻むれはとりて向ふところあだこそなけれ海にくぬがに

黄なる海唐くれなゐにそまりけむうちくだかれしあだのちしほに

いくさぶね數をつくして白旗をかゝげしむべき時はきにけり

やけのこるからふねいまはなにかせむとくゆきてうてペキのみやこを

日の御旗さしたてむ日はちかづきぬ支那のユキシがすめる城のへに

山縣將軍におくる　勝安房

いさましき軍だちかなまつろはぬかたきを解きて早歸りませ
ほこ取りてますらを健男ら渡るらむありなれ川の波高しとも
さしてゆく吾日のみはた朝かせに雲吹き拂ふ高麗のしら山

連戰連勝の報をきゝて　黒田清綱

此秋はとわたる雁の音つれをきくたひことに嬉しかりけり

征清の吾師の大捷をきゝて　藤島正健

日のもとの國の光はいとゝしく天の下にそかゝやきぬらむ

吾子海軍大尉西紳六郎の某艦に乘て○○海にあるもとに　從三位西夫人　竹子

あら波の中にたつとも大やしまやしまの神の守る船あり

征清の軍士をおもふ　石原誠

てる月に鎧のそでやぬらすらむ虎とりひしゞますら猛夫も

〃　立向ふかたきもがあといさみつゝ月につるぎをとぎみがくらむ　横瀬二郎

〃　國の爲いくさする身はもろこしの虎ふす野邊に幾夜ねぬとも　平井芳夫

〃　つゝの音もけぶりもたえて鴨綠の川風きよく月や見るらむ　乾政彥

〃　月さゆる秋の夜ころはいとゞおき思ひぞいづるもろこしか原　齋藤雄助

〃　あだにしも日を過すべきとつ國にがばねさらせる人もある世ぞ　木川又吉郎

〃　さらぬだにねざめがちなる秋のよは鋒のまくらぞおもひやらるゝ　麁口秀雄

〃　山下榮太郎

月見てぞいとゞおもひはまさりける筒まくらせる人はいかにと　岡田武松

仝

この夕月かげしろしもろこしの草のかき葉も見えわたるまで　黒川耕作

仝

敵まつと太刀ぬきつれてますらをがこよひの月にもりわかすらん　池田正彦

仝

から國に草まくらするものゝふも同じこゝろに月や見るらん　服部直樹

仝

雨につけ風につけてもおもふかな御軍すゝむもろこしが原　新井宗太郎

仝

しもましり砂とふ野へに駒なめてすゝむもをゝしやまと益荒男　田中米太郎

仝

虎ほゆる國にむかひし人もなほふるさとしのぶ夢や見るらむ　青木武助

仝

こよひこの光りくまなき月かけを、わがものゝふはいかに見るらむ　古谷辯三

海戰大捷

ゐみしらの血汐なかれてくれなゐの涙こそさわげ黃海のあたり　讀人知らず

心やり（四首）

國のため君のみためといさぎよく捨てし身なれば何なげくべき

さらばとてゑみて別れし其さまを猶まのあたり見る心地して

父君はいつかはかへりきますさんと問ふをさな兒に何と答へむ

いさををば人のほむるをきく度に涙ぞそでにせきあまりつゝ

小學校生徒の師の別を送るを見て　米澤與十郎

師の君のあと見おくれるをさな子は親に別るゝこゝちなるらむ

こたびのいくさに就て　同

から人の長き夢をやさますらむ大御いくさの銃のひゞきは

すむといふ虎も力やなかるらむ神風すさぶからのあら山　跡見花蹊

失題

いさましき風のたよりにこの秋はあはれてふことをもおぼゑざりけり
秋風の身にしむごとにから衣うち平げむことをしぞおふ　無名女史

戰死者の遺族に代りてよめる

もろこしの嵐しのげとたち縫ひしこの皮ごろもいかにせよとか
おもひかねぬ窓おしあけて詠むれば月かたぶきて雁なきわたる

廣嶋にて人々に別るゝ折よめる　陸軍中尉　土井彰

ものゝふの行方いかにと人問はば水のながれと我は答へむ

擬從軍行　岩田操

秋たかし駒も肥えたり進めてふ神のみことや今かゝるらむ

日本刀　佐々木叙二郎

大神のつたへましつる此太刀に向はむ仇はあらじとぞ思ふ

日本男兒　半井春之進

かゝるをり君のみために死にてこそ大和をのこといふべかりけれ

同　半井たけ子

うてば勝ち進めばやぶる荒益夫はやまとの外にあらじとぞ思ふ

征清の兵士を懷ふ　羽計利柄

益荒雄のいくさする野やいかならむ袖におはゆる今朝の初霜

仝　吉田穣

家にあるも寒きゆうべをいかにしてからの荒野に仇やもるらむ

征清軍　後藤富哉

ひろごれるうばらからたちなぎすてゝすぐなる道を今ひらくらむ

折にふれて　中山和吉

仇はふる時こそ來ぬれますら男の太刀もうれしと聲に出でつゝ

黄海大捷　宮地巖夫

龍はみな海にしづみて天つ日の御旗のみこそ輝きにけれ　米澤與十郎

坂本少佐

おのれまづ玉とくだけて艦の名の赤きこゝろを人に見せけむ　天龍子

征清の師をおもひて

霜さそふ秋の夜寒におもふかなわが御軍のたよりいかにと　無休閑士

鴨綠江

御軍は高麗のあら山けふこゑて今こそわたれありあれの河　大綱恕哉

折にふれて

この夜頃まくら刀の躍るかなむかし鍛ひし腕のおぼえに　子爵　品川彌二郎

時事に感する事ありてよめる

高麗人も唐土人もこゝろせよやまと劔の曇もりなき御代　同

韓國に出師のさまを見て

異國の嶮しき路にすゝみゆく大和心の駒の雄々しさ　吹野信履

中秋の夜月くもりければ

日の御旗ひかりかゝやくこよひとて月の光のうすくもありけん　同

清國を征ちたまはんとて廣島に行幸せさせたまふ時平壤の捷報をきゝ侍りて

くたら河くたれはのはる舟人やてる日の御旗あふき見るらん　駕雲齋宰風

連戰連捷

丈夫の赤き心を梓弓八十嶋かけて曳く力かな　徒然坊

折にふれ

駒とめて誰かはめつる金風にもみちちりしく高麗のはり原　金子雄太郎

擬營中作

から人の駒にはかはしわかさらす屍によしや草はむすとも

雲霧を筒のひゝきにはらはせて高麗の荒野にすめる月影

たきすてし篝の烟かつ消ゑて雪より白し今朝の初霜

平壌にて奮戰したる大嶋少將の心を推しは

かりて　日本撫子

よしやわれひとりなりとも進みいて丶討たんとそ思ふ千よろづのあだ

草むすかばね　濱田義孝

さらしたるかばねにむさむ草までもからの風にはなびかざるらむ

平壌城　佐藤卓三

龍のすむくもうちはれてへくしやくの城にか丶やく日のみはたかな

ゑみし草　及川宣之

ますらをが手にとる太刀のたちまちになぎつくしたるゑみし草かあ

からくれなゐ　武田好雄

きりすてしゑみしが首のちしほをばからくれなゐといふにやあるらむ

ありあれ河　今井行信

から人をうちてしつめて橋にしてありあれ河もた丶わたらなむ

太刀まくら　伊藤文用

北のみやこおとし丶ゆめやむすぶらむこまのあら野に太刀まくらして

もろこしか原　瀧川逸太

日のまるの御旗のかせになびかざる草はあらじなもろこしが原

ちしほ　遠山景次

もみちする時もこあくにから人のちしほにそみぬもろこしが原

北のみやこ　富田誠一

みいくさをす丶めすゝめてこの秋はきたのみやこの月も見るらむ

波の上の月　深澤徹

から舟はなべて沈みて波の上に月こそ殘れ八重のうな原

征清の軍人に贈る　勝信道

玉の雨つるぎの風ははけしとも功を立よ健らたけ男ら

かみ風　松森寛明

神風もまたふかなくにおきつ波よせてくたけしゐみし舟かな　野崎貞世

ゐみしか舟にけて行くゐみしが舟の數までもさやかに見する稻妻のかげ　植木琴雄

檣上の月

しつみにしゐみしが舟のほばしらにかゝれる月やさびしかるらむ　北代文六

白旗

しら旗をふりかざしつゝにげまよふ舟こそあはれ波のまに〳〵

鰐魚

から人の屍たづねて波の上にをり〳〵うかぶ鰐もありけり　菊田正友

鬼火

から舟の沈みしあたりかさ夜ふけてほのぼぞもゆる波のほの上に　竹谷義臣

月照軍艦

光さす月の船こそ我艦のすゝむ涙路のしるべなりけれ　小林正和

告別

敷嶋の日本の太刀を我れ佩きて見ぬもろこしの月をなかめん　無名兒

紅葉の命を風に任かせおきて投つる筆に太刀の聲あり

折にふれて

日のいつる國はゐか國鉾とりてつきいる山はもろこしの山　泣男

色もなきしこのから草から〳〵に刈りつくさあんしこのから草

わたかまる龍の玉得てこ打つ太刀の手に覺ゐある大和のをの子　牛井豐彦

敵艦の沈沒

大鹿嶋や沖に沈みしからふねの名殘はかりに波のよる見ゆ　池田毅

喇叭卒

ふゐの音は命と共にたゐしかといさをはなかく世に響くらん　桑山貞常

喇叭手

いさましき君か今はの笛の音は天の下にそひゝき渡らむ

軍中の歌におそらへて　春の家和民

とりて守る夜半のかゝり火影ふけてこまのあら野に秋風そふく

平壤大捷　狩野利房

くたら河くたれはのはる舟人や照る日のみはたあふき見るらん

擣衣といふ題を得て　八疊庵主人

太刀風にひゝきをそへてから衣から山あたりうちしきるなり

我海陸軍の大勝を聞きて　同

さしのはる朝日の御旗かゝやきてもろこし人もまはゆかるらむ

征清の事を思ひて　高川觀瀾

皇軍かぬきもてかさす燒太刀に月さしのはるもろこしの原

軍中の歌になぞらへて　春野家和民

乘る駒のたちかみ白く霜おきて夜風身にしむ高麗のはり原

いさやまつ駒のり入れて渡らまし仇波さわくありあれの河

谷田工兵少尉の朝鮮へ行くを送る　一柳安次郎

くあたふれしなのやつこら切りなひけいさを立つへき時は來にけり

今とし望の夜の月をみてよめる　今成文平

こまの野の露にふし寢のつはものはいかに今宵の月を見るらん

擬營中作　風流吏

武士のよろひの袖にかつちりてもみち葉寒し高麗のはり原

日清事件偶感　塚原等

燒太刀の利心起し茂り合ふからのしこ草刈拂はなむ

平壤の戰捷　同

乘駒の手綱とゝめて暫くは水飼ゆかむありあれの川

南州先生　岩田操

みいくさの進まむ道に先たちて君か御魂やあまかけるらむ

題しらず　中西美之

眞柴かるわらべも磯のあますらもわが勝ち軍いはぬはなし　柴田延吉

仝

おほきみの御旗にかよふ神風に今こそなびけもろこしが原　戸田則素

仝

うちいでてたまと碎けし益荒夫も天かけりつゝ仇まもるらむ　伊藤熊槌

從軍せる友を思ひて

君が立てむいさをいかにと御軍のたよりのみこそ待渡りけれ　出浦清格

かなじく

秋かせの身にしむ夜半を益荒夫はしらぬ荒野にもり明すらむ　同

月の夜よめる

よき仇をわすは斬らむとこの月に太刀なでて見る人もあるらむ　同

捕虜の待遇を見て

大君のふかきめぐみはわが民もいびすの民もへだてざりけり　古谷雪綱

仝

ひらけゆく御代のしるしは仇にさへ君のめぐみはかゝりけるかな　古谷さき子

提報屢至

御軍の勝ちつるたより聞く毎に大和男子のいさをしぞ思ふ　天馬生

擬從軍作

日は暮れて時雨は雪になりにけりとりては遠し駒はなづみぬ　山田正賢

斥候

明日うたむ敵やいかにと待宵の月をたよりに駒すゝめつゝ　織田立霞

西旅團長の出征したまふはなむけに

大君の御楯とありて後の世に語りつくべき名を立てよ君　織田氏に答ふ　陸軍少將西寛二郎

唐土の虎伏す野邊にしき嶋の日本心の花をこそ見め　香取總麿

月前遠情

唐國のあたに向ひし益荒雄はいかに今宵の月や見るらむ

同

戰死者の靈に手向くとて

屍こそ高麗の荒野に朽果ぬ雲井に高き名をぞとゞむる

元陸軍少尉　楢崎庸輔

豐嶋沖に高陞號を擊沈めしを

擊放つ火つゝの煙末見れば波間にしつむこと國のふね

同

成歡牙山の戰勝を

諸共に勝ときあけて進みゆく皇軍のいさましきかな

海軍大佐　佐藤鎮雄

石塚大主計の戰死を悼みて

石塚に名をきさみてよ君がためすてし命のかはりなりせば

會田安昌

軍中月

丈夫か手なれの筒のうつたへに仇おふ月夜冴かなるかな

泉信吉

征清

手力をこめてうちなは唐衣たてぬきなしに亂れ果なむ

戰へば必まくる支那のなり行を思ひやりて

會田安昌

末つひに鴨綠川の川水も我おほみ田にまかすへきか那

城嶋宗嘉

日清戰爭

山縣の嵐の風のはけしさに草木をれふすもろこしか原

伊藤落葉

近詠

月きよし夕涙たかし海原の千里をかけて行く船もかな

櫻園豪尊

捕虜

色もなきからなてしこそ哀なるくれ行秋の霜をのかれて

荻原嚴雄

黃海の戰捷をきゝたるとき

わたの原煙り渦まくなかぞらに光りかゝやく日の御旗かな

黑かねを碎く矢玉の力にもまされるものはやまと魂

月あかゝりける夜朝鮮の戰場を思ひやりて

鎌田正夫

韓國の野山の月はくもるらんあた打ちはらふ筒の煙りに

某氏の從軍を送るとて　川上半四郎

よしや身は虎ふす野邊に朽ぬともその名はのこれよろづ代迄に

日清韓事件に皇軍の連戰連勝を祝ひて　橘道守

御軍の御稜威にふさぬ草もなし高麗野百濟野唐土が原

仝し時全勝を思ひやりて　同

日の本の日の大御旗輝かんありなれ川の北のみやこに

九月十三日(陰暦)遥に大本營を拜し奉りて　大口鯛二

皇軍のたよりまたして假宮に今宵の月やみそなはすらん

朝鮮東學黨を　會田安昌

くたかけの林にさわく下風は東よりこそ吹たちにけれ

折にふれて　坂井辨

駒とめて誰か愛らん秋風に紅葉ちりかふこまのはり原

皇軍の連捷をきゝて　千葉胤明

勝鬨の聲の絶間もあかるべしこまもろこしの海にくぬかに

奉送　大元帥陛下作歌　宇田川文海

天の下有らゆる國に日の本の光仰がすときはきにけり

皇のみはたの風に言さえぐ清の草木も今ぞ靡かむ

騎兵大尉島田咸應君が朝鮮に出陣するを送り　同

乘る駒の心いさみてそのいさを鴨綠江に水やかふらむ　佐伯順

朝鮮人

唐土の原にあゆみを運びしい心の高麗の迷ひなりけり

あまたゝび我軍の大勝利を聞て　小林正和

書の紐解てみれども斯ばかり勝てるためしは古へもあし

海山と所かはれど勝事はかはらざりけり所かはれど

高千穂の檣頭にとゞまれる靈鷹を　同

高千穂の名こそ高けれ八咫烏こかねの鶏と翼ならべて

空にとぶ火中翔りて進みけむ我船舳をさらぬあら鷹

己が名の高く止まりてたはやすくいつも勝ぞとしらせ顔なる

橘　道守

仝

高千穂の船の上去らぬはし鷹やよことまをしの天はせ使

同

辱知海軍將校の戰死を

兼てより火にも水にもと言ひし君亡數にさへ入てけるかな

同

辱知海軍士官の戰地にあるに送る

天地の神のまもれる軍ふね進めますらを進めものゝふ

同

俘虜を見て

うつ太刀のしもを逃れしから菁辛くも露の命とめけり

原田重吉君が玄武門を開きて偉勳をたてら

れしをきゝてよめる

手力雄神まもりけん千五百人守る金門を易くあけしは

同

七十七歳　多田了證

軍人の出征を見て

昔し人髭そめてたに出し物をはかなし我は老てけるかな

小林正和

捕虜あまた赤十字社病院に行をみて

大君のみたまのふゆにうるはへる身を嬉しとやかたりあふらむ

内山温載

大同江落葉

吹きすさむ我神風の烈しくてから紅にちるもみぢかな

朝鮮國豐嶋近海の海戰に我軍艦三艘の勝軍

賀茂水穂

を雪月花によそへてよめる

涙速　敵の運送船高陞號を打沈む

仇波をうちも沈めて涙速江の月の光ぞかゝやきにける

秋津洲　敵艦操江を捕獲す

み雪なす白旗とりて秋津洲富士より高きいさを立けり

吉野　敵艦濟遠を擊卻く

三芳野の烈しき風に打みだれちりうせにけんあた波の花　竹中茂丸

朝日影がゝやくふねの旗風に霧晴れわたる豐しまか沖　片岡哲

折りにふれて

切はふり山おす屍ふみ越けて進めや進め唐土のはら　神本國臣

在韓軍人に送るとて

戰沒したる將士を悼みて

きみのため屍草むし國のため骸みつきてうせし人はや　大野寛蔭

松崎大尉

名に高き常盤の松の一本ゝ枯れて後こそ色まさりけれ

君が身はこま野の露と消ぬとも譽はつきしよろづ代迄に　同

折にふれて

日本刀鞘ぬき放ちから人の身にあてつべき時ゝきにけり　内山千足

高千穗の鷹

彌高き神のみわさや高千穗にたかやどるとは愛たかりける　千家尊福

仝

山からも小からも鷹の一よせに狩盡せとや天翔りこし　乃木少將

廣嶋營中作

數からぬ身にも心のいそがれて夢やすからぬ廣嶋のやと　梅田眞澄

第一師團歩兵上等卒双木平吉氏の從征を送る

國の爲め身は白露と消ぬとも玉と見られん事をこそねがへ　双木平吉

かへし

捨る身は露いとはねどもろこしのしこのゐみしにやる首はおし　千家尊福

大本營に參り侍ひて

軍人いかにたふると御袖にも野山のつゆのかゝる畏しこさ

陸軍豫備病院にて　同

君か爲捧けし身さへ惜むらん更にすつべき時をまつまは

身に負ひし痛手にそへて見るべきは人におくれぬいさをなりけり

同

仝しおり捕虜を見て

仇なせし怨にかへてから衣いくへ重なるめくみなるらむ

皇軍の鴨綠江を渡りぬときゝて　同

昔より溢るゝものは鴨綠のながれと君かみいづおりけり

九連城の清軍の逃去りぬときゝて　同

さなからに殘るも哀れひと心くつれしあとの仇の石垣

消へのこる籌のはかの影もなし砦はこまのこゑもとゝめて

第二軍の出發を送りて　同

諸人のこゝろの駒もみいくさの進むと共にいさみたちつつ

同しおり埼玉縣より出たる軍人多ければ　同

埼玉の光もさらにさしそひて世にかゝやかん功こそまて　植松有經

もろこしへゆく人に

身こそかく衰へにけれむら肝の心は君に後るべしやは　坂正臣

仝

打きりて持ちかへるには便よし髮長あたまみやげにはせよ　大口鯛二

仝

君ゆきて日の大御旗さし立よ支那のこきしが住る城のへに　矢田饒

仝

常ならば別い悲しかるべきを勇み立てもおくるけふかな　伊藤信行

仝

みことのりいたゞきもちて勇みたつ心の駒のつなゆるめそ　川崎千虎

仝

神風はこまもろこしのはてまでも吹くべき時ぞいざいそげ君

折にふれて　勝安房

虎吼えて風ふきしまく大雪をくへはらかし進む御軍　大鳥圭介

仝

一ふりの大和をのこの太刀風に散て敢なきけしの花瓣　蒲清民

日清戰爭

大御旗高くさゝげて軍ひとすゝめや進め天津みなとに

大君のみことかしこみ廣嶋やみいくさ艦は朝開きせり

いざ進み日本つるぎの霜の色にからくれゐねに紅葉する迄　渡邊章

仝

沈みつる艦のなごりも波の上に朝日たゝよふ豐嶋の沖

濁りつる鴨綠河も水かみにかへりてすまむ時は來にけむ　玉井徹

仝

雲霧もさやかに晴れて日の本の光にてらすもろこしの原

から山の風にかれたる松崎の功はちよもくちせざりけり

大君の大御心もひろ嶋の行幸をいはふよろづ代のこゑ　河合清魚

仝

劔太刀日本健男の利心をふりかこすべきときはこの時

薙はらふ皇いくさの太刀風に人草もろきもろこしの原　神山敬三

仝

ますらをが磨く御國の劔太刀薙てそはらへ支那の醜草　田近基德

仝

虎のゐすゑあら野の小草かりとりてやまとおでしこ植生すらむ　岡部讓

偶感

嘯きし虎は懷きぬ丈夫よあらぶる龍を手とりにはせよ

から鳥は皆逃散て獵人のいさみがひなきもろこしが原

敵うつと天にとゝろく筒の音は君が御稜威のひびきなりけり

中裁拒絶せられしときゝて　小林正和

餘所にみてとくものもなし唐糸の結ほほれしは心からとて

民政廳を置れしより清民帝德に化すときゝて　同

大君の惠のつゆはもろこしの草葉にすらもかゝりけるかな

玄武門を開きし原田氏の偉勳をたゝへて　同

千萬の敵のまもれる門こゝて笑の眉さへ君やひらきし

大連灣攻擊の折再び高千穗に鷹とまれりときゝて　同

帆檣にあれも止るか高千穗の高かる友の名をしたひきて

李鴻章　同

今ハはや齡も國もかたふきぬあはれいつ迄殘る老木そ

折りふれて　齋藤延正

いとみしハ夢ありけりな枕邊のまくら刀の魂やよりけむ

日本刀

燒太刀のはがねのさえにもろこしやこまの山霧はれにけるかな　伊藤春園

神太刀のさやはらひてはもろこしのいく千萬の仇ものかハ

喇叭手某の戰死　西村忠兵衛

玉の緒の絶ゝて絶ゝぬはふくふゝの音よりたかき君かいさをし

冬の夕征清軍人をおもひて　敷浪訓吉

窓たたくあられの音もますらをの銃のひびきと聞きなされつつ

日本男士　同

大君の御旗かざしていさみゆく益荒たけ男に仇なかりけり

從軍行　岩田操

君のため死ねと誨へしたらちねに答へむはぞの勝ぐさもがな

遠征の途に上る　長谷塲致堂

宮島の神に行手を祈りつゝ鹽の八重路に乘り出てにけり

右途中　同

高麗の海百濟の濱はいかならむ門司の港は涙靜かあり

黑烟り吐きつゝ進む船の上にくにの基を謀りこそ行

眼をば更にさへぎるものもなしたゝ伏し拜む旭影かな

天長節を賀し奉りて　吹野信履

もろひとのきみかようたふいふきにはもろこしやまもうちゆするらし

くかにうみにたてしみはたのひかりにてことはきまするこゝちこそすれ

近詠の中に　金子雄太郎

ねみしらのよせくと見しは夢なれや枕にちかくくつわむしおく

寐られぬは夢もむすはす秋の夜を何おもひてにもりあかさなむ

こゝろなきねみしも秋はたへさらむふけゆく月に胡笳の聲する

虜らか屍の山にせきとめて鴨綠江をかちわたらまし

日々の戰ひに心さへ勇みたちて　不二山人

老らくのはどもわすれてしら髯を染てとだにもおもひける哉　同

九連城の秋をおもひやりて

かるかやにあらぬ物から秋風にみだれてけりなもろこしの原　同

支那兵の敗北するをきゝて

戰はまだはてなくに唐土の虎ふす野邊は冬枯れにけり　同

寄國祝

いづくまで照渡るらん久かたの我日の本の國のひかりは　波多野茂見

明治廿七年の仲秋の良夜感する所をよめる

駒の上に戈横たへてますらを男がからの荒野に月や見るらん　與謝野修

皇軍鴨綠江を渡ると聞きて

秋高く馬肥ねにけりありなれ川いさうち越ねて仇屠らなん　梅園寅清

廣嶋へ御行あらせたまひける時

か羅國をことむけ勢ひとかしこくも我大君は軍たゝせり

御親征あらせ給ふと聞き侍りて　齋藤延正

ゐみし等をことむけますと吾大君御太刀はかして安藝に行幸す

戰場をおもひやりて　眞木幹

ちり亂すあだのかばねに霜おきて朝風白しもろこしか原

からくにへゆく人を送る　國分操子

かたりつきいひつきゆかむのちの世に名をこそをしめ身をはおもはて

時事　齋藤延正

たまきはる命をしくは船のへに白旗立てよおその國人

擬從軍作　讀人しらす

戈まくらいく夜か月をなかむらむ虎のうそふくもろこしの山

秋の夜從軍者を思ひやりて　羽鳥倭文雄

富士の嶺は初雪ふりぬものゝふか高麗のあら野に霜やわふらむ

憶遠征と題せる圖に　徒然坊

韓國の城の邊に立ちて吾背子もおなし心の空やこふらむ

題しらず　高橋貞親

まつろはぬしこ草かりて大君のみかり野にせんもろこしか原

贈某兵士　田口文軒

益荒夫の死ぬべき時ぞそびらにはたまをな受けぞいざ立ちて行け

軍籍にある人の身まかりければ　米澤與十郎

君のためいのち死なむと誓ひてしその言の葉は猶のこれるを

留別　町田直樹

日の御旗立ちかへるまてまつ風のたよりもうとし故郷の空

秋の夜從軍者を思ひやりて　日本撫子

松浦かたうち出て見ればたゝならぬ雲こそさゆけもろこしの空

擬營中作　吹野信履

おくれしと思へはなとかいとふへきつるきのやまもゆるほのほも

木枯しにいはゐしこまのこゑたゐてつきかけたかくとらはゆるあり

折にふれて　竹の里人

君が着る羅紗の衣の薄ければな吹きおろしそから山おろし

擣衣　小堀房輔

軍人い高麗にわたりてから衣うつ音寒き秋の夜半かな

折にふれて　瑞鑵

ぬきはおつ太刀のはさきにやとりけり霜より寒き秋の夜の月

戰後　碇孝行

かはね吹く風もの凄く小夜更けて鬼火かすかにもゆる萱原

鳳凰城　金子雄太郎

見さくれは鳳凰城に秋更けて月吹きおろす山おろしの風

折にふれて　香取憲章

かしこしやかりの宮居をうしな潟うしとも君はおはさすやあらむ

向所無敵　渡邊三華

ほことりて向ふから山虎もはえす月はかりこそすみのはりけれ

征清行百首の内　佐々木信綱

高麗の野の草むす屍からの海の水つく屍もたゝ君の爲
波荒き大海原のおくつきに身を沈めむもたゝ國のため
攻取りて日の大御旗つきたてむ仇の都の城のやぐらに
盡すべき時は今なり國のため命捨つべきときは今あり
武士の八十伴のをがくにの爲め盡しまつらむ時はこの時
外國の野邊に屍をさらさんはますら武夫の譽にやあらむ
敷島の日本男子のをたけびに爭かで向はむ漢のゐみしら
家にあれど堪ぬ暑さを軍人高麗のあら野の何地行らむ
草深き高麗のあら野に眺むらむ雲のたゐまの有明の月
程もなく我物にせむから國の景色よき山けしきよき川

駒おべてこまの荒野を朝ゆけば旗手靡かし秋の風ふく
ぬば玉の夜は更ぬらし銃とりて守るとりてに月傾きぬ
打渡す駒のあがきによどむらむありなれ川の水の白波
鞭うちてうなかす駒のたてがみに朝風さむし野路のゑの原
さし昇る月影すごし舟とむる大海原のうづしほの上に
神の守る大御軍のゆくてには立波もなしふく風もなし
向ふ所向ふあたこそなかりけれ我み軍の稜威かしこみ
み軍の旗手の風のはげしさに尾花なみふす唐土がはら
勝鯨聲は海にくぬがに聞ゆなり波に響きて谷に響きて
み軍のをゝしさを知れ如何にぞと下に思ひし外國の人
めの前の勝は思はず進めかしあたのみやこを攻取ん迄
から人のねぶりも今は覺ぬらし海にくぬがに打破れつゝ
戰の雲おさまりてあらび臥すかはねを照す十六夜の月

勝戰ことはぐ艦をてらすなり波よりいづる十七夜の月
たちまちの月は昇りぬ仇の舟しづめ果てたる荒浪の上に
よろぼひてにけ行く敵を照す覽ありなれ川の秋の夜の月
あたおひて夜ぞ更にけるぬは玉のか黒き駒に露置迄に
玉の緒の斷んとすれど笛の音を猶たゝざりし男子よ哀
雨となる玉をもよそに壁よおぢて門開きつる丈夫あはれ
己が身は燒けたいれつゝ我舟の炎けしつる男の子よ哀

題知らず　枕戈生

幾たびか敵よるかと太刀とれば軒端に渡る夜半の木がらし

征清軍の大捷を祝し奉りて　大勳位　晃親王

日の光り照す限りは大君のみいつにそむくあたやおからむ

仝　正七位　則武正副

からくにの草木もなひきふしにけり我が大君の大御いふきに

鷹　　梅園實靜

高千穂にとまりし鳥の隼をはやくも君に奉りけり

御親征を聞き侍りて　　夏井範光

大御心廣島さして大君のいでましにけり廣嶋さして

波上月　　八疊庵主人

からふねのなかは沈みし波の上をすごくも照す月のかげかな

うからの君たちかみこゝろおもひやり侍りて

陸軍大尉　林　陸夫

けなけにもはまれは得つとはゝゑみてあかぬこゝろやかなしかるらむ

過日天津在留の一行と別れて旅立とき何と

のふ心憶せしときよめる　　鐘崎三郎

己が身にくらべて見ても今ぞ知るたけきむかしの人の心を

冬陣の餘興として劍道々具取り寄せたる時

昔へはさやけくおびし太刀の道いよゝ研きあんもろこしの冬

陣中作　　陸軍大尉　隈元實道

打しにのかはね枕に唐土の山の端たかく月を見しかな

始めて花園河口に上りて金州にゆく途中い

と廣き砂地ありて行手を見れは白雲のみか　　長谷場致堂

ゝりて里ありとも見へざりけれは　　竹下種長

行くるゝ處や今日の宿あらむさす手はるかに白雲の途

金州城の落ちしを　　同

日の本をれろす嵐の早けれは金州山の木の葉とをらす

大連灣の邊り砲臺の門に永固海强の四字刻

り付けあり此處は去ぬる十七年佛國との戰

の後築造せし處とか聞きぬ　　同

長への海のかためとしるしけむその命毛のあはれ短かさ

双嘉溝にて我が勇しき兵士の死骸を見て　同

いさをしの音つれをまつたらちねの夢はこのごろいかにかあるらん

支那人の屍夥しくあるを見るに土偶に似て何も物思はしき樣なれば戯に　同

うつせみの世はかりそめの住かぞとさとりがほにもみゐししかばね

としのくれ　東久世通禧

みいくさのかちしをつくる聲すなり市ハせはしきとしのくれかな

仝　嚴夫

かちにかつみいくさ祝ふ聲のうちにことしもくれになりにけるかな

討清歌集　終

明治二十八年二月十五日印刷
仝　年二月十九日發行

編輯兼發行者　大阪市南區末吉橋通四丁目八十六番屋敷　大淵渉

印刷者　大阪市西區土佐堀通三丁目三十八番屋敷　今村謙吉

發行所　大阪市南區心齋橋北詰八十六番屋敷　駸々堂

版權所有